速報版

子どもの生活と学びに関する親子調査2015

ISS 東京大学社会科学研究所　ベネッセ教育総合研究所

「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて

■研究プロジェクトの目的

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所は、2014年1月に、「子どもの生活と学び」の実態を明らかにする共同研究プロジェクトを立ち上げました。このプロジェクトは、子どもの生活や学習の状況、保護者の子育ての様子を複数年にわたって調査し、それらが子どもの成長とともに、どのように変化するのかを明らかにするものです。これにより、子どもの生活や学習、子育ての現状や課題をとらえ、よりよい教育や子育てのあり方を検討します。

■研究プロジェクトの特徴

1. 小学1年生から高校3年生の「現在」と「時代変化」をとらえることができる

このプロジェクトでは、小学1年生から高校3年生の子どもとその保護者に対して、毎年継続して調査を実施します。これにより、12学年にわたる子どもの生活や学び、保護者の子育ての実態などの「現在」の様子（1時点の学年による違い）を明らかにできます（図中①）。また、経年比較により、子どもと保護者の「時代変化」をみることができます（図中②）。

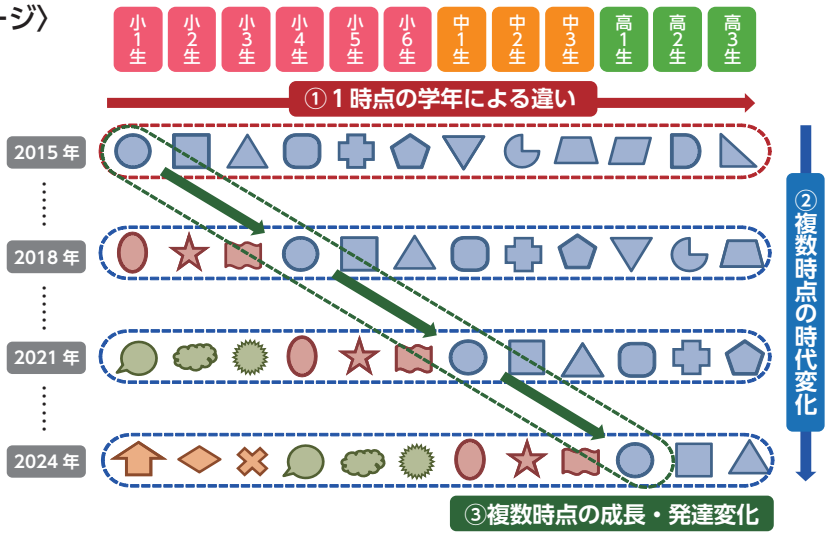
2. 親子の「成長・発達」のプロセスをとらえることができる

また、このプロジェクトでは、同じ子どもとその保護者を継続して調査します。これにより、子どもが毎年どのように成長・発達していくのか、また、それによって保護者のかかわりや意識はどのように変化するのかといった、親子の「成長・発達」の様子や因果関係を明らかにすることができます（図中③）。

3. 子どもの生活と学習にかかわる意識や実態を幅広く、詳細にとらえることができる

子どもを対象にした調査では、生活、学習、人間関係、価値観、自立の程度などを幅広く尋ねています。また、保護者を対象にした調査では、子どもへのかかわりや子育て・教育の意識などを尋ねています。この2つの調査から、子どもと保護者の日々の生活や学習の様子を浮かび上がらせるとともに、子どもと保護者の課題に迫ります。

〈調査イメージ〉



目　次

「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて …2
調査概要……3
基本属性……4～5
1. 子どもの生活 ……6～9
2. 子どもの学校生活・勉強 ……10～13
3. 保護者や他者とのかかわり ……14～16
4. さまざまな経験 ……17
5. 子どもの自己評価 ……18～19
6. 保護者の教育観や悩み ……20～22
7. 保護者自身の活動が子どもに与える影響 …23
調査企画・分析メンバー ……24

調査概要

●**調査テーマ**　【子ども調査】子どもの生活と学習に関する意識と実態
【保護者調査】保護者の子育て・教育に対する意識と実態

●**調査方法**　郵送およびインターネットによる自記式質問紙調査　※回答者がいずれかの方法を選択。

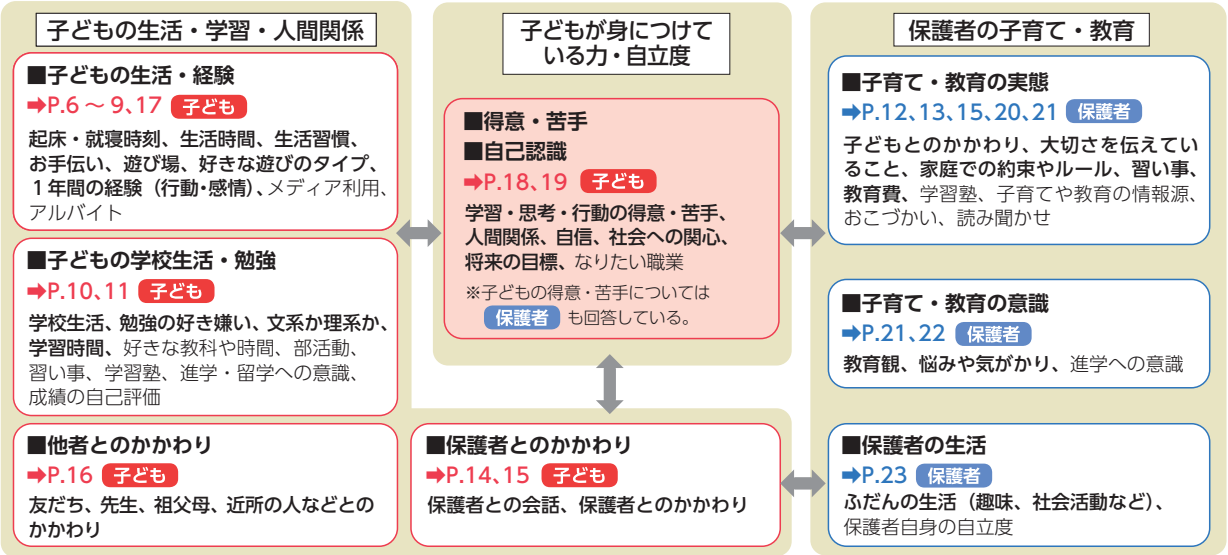
●**調査時期**　2015年7～8月

●**調査対象**　全国の小学4年生から高校3年生の子ども、小学1年生から高校3年生の保護者

学年	子ども・保護者	子ども			保護者		
	発送数（組）（調査モニター組数）	有効回収数（人）		有効回収数（%）	有効回収数（人）		有効回収数（%）
小学1年生	5,504	–	–	–	1,755	4,707	85.5%
小学2年生		–			1,434		
小学3年生		–			1,510		
小学4年生	5,080	1,345	3,972	78.2%	1,345	3,975	78.2%
小学5年生		1,292			1,293		
小学6年生		1,335			1,336		
中学1年生	5,379	1,343	4,091	76.1%	1,351	4,130	76.8%
中学2年生		1,366			1,384		
中学3年生		1,381			1,393		
高校1年生	5,606	1,267	3,919	69.9%	1,287	3,964	70.7%
高校2年生		1,291			1,302		
高校3年生		1,360			1,374		

※本研究プロジェクトの「調査モニター」全員に、調査票を配布した。
※「調査モニター」は、全国の小学1年生～高校3年生のリストから、全国7地域の児童・生徒比率（文部科学省「学校基本調査」平成25～26年度）に応じて抽出した「調査モニター募集対象者」に対して、2014年2月から2015年5月にかけて募集した。
※学年別の「有効回収数」は、回収した調査票のうち、学年が不明な票を除いた数。

●**調査設計**　「子どもの生活・学習・人間関係」の意識・実態や「保護者の子育て・教育」の意識・実態が、「子どもが身につけている力」や「自立」の程度とどのように関連しているのか、また、それらが高校卒業時点での「自立」にどのようにつながっていくのかを明らかにできる設計である。



※上記以外に、子どもの属性、保護者の属性に関する項目を尋ねている。
※小学1～3年生は、子どもの項目の一部を保護者が回答している。
※本速報版に掲載している項目を太字で示している。

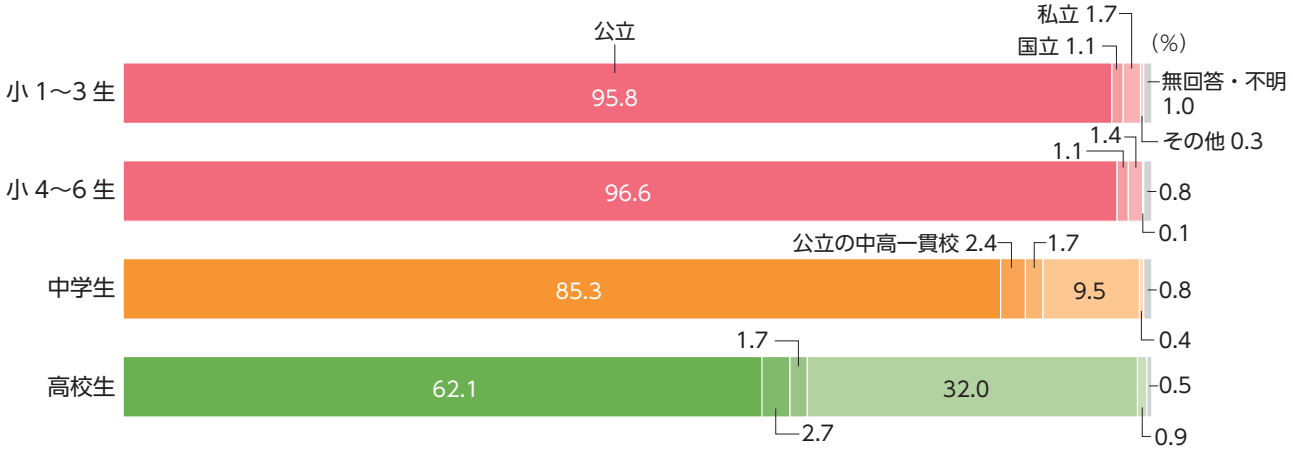
●**データを読む際の注意点**

①本文中では、小学1年生を「小1生」のように表記している。また、中学1～3年生を「中学生」、高校1～3年生を「高校生」と表記している。子ども は子どもの回答、保護者 は保護者の回答を示している。
②図表において、1学年ごと、あるいは3学年ごと（小1～3生、小4～6生、中学生、高校生）の有効回収数すべてを集計している場合は、人数を示していない。
③図表で使用している百分率（%）は、小数点第2位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。

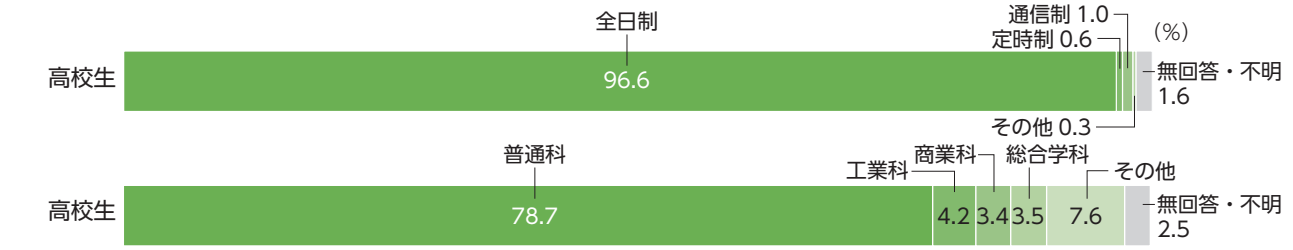
基本属性

●子どもの性別（学校段階別）

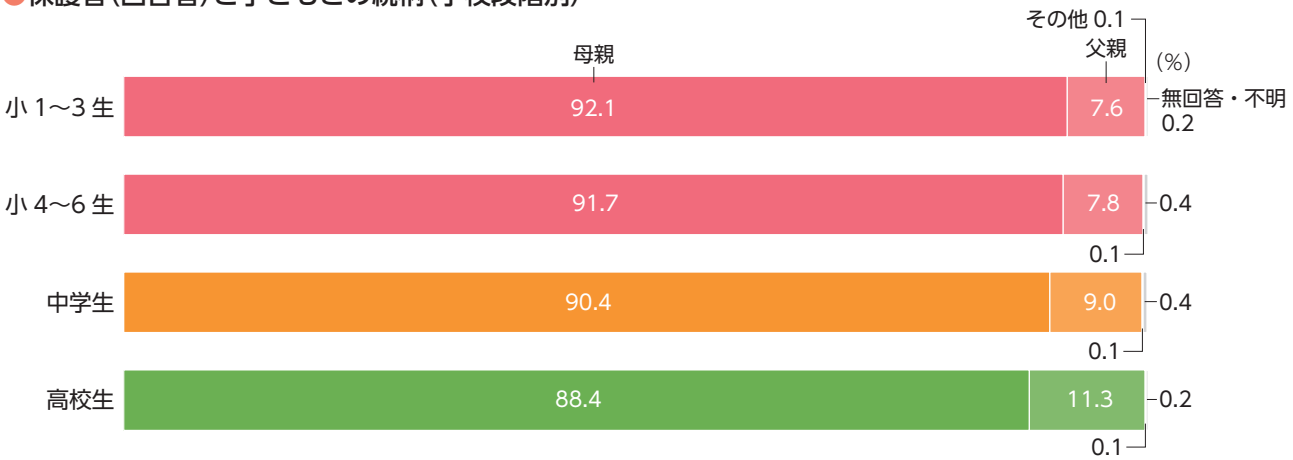
●子どもが通っている学校の種類（学校段階別）



●子どもが通っている高校（課程・学科）



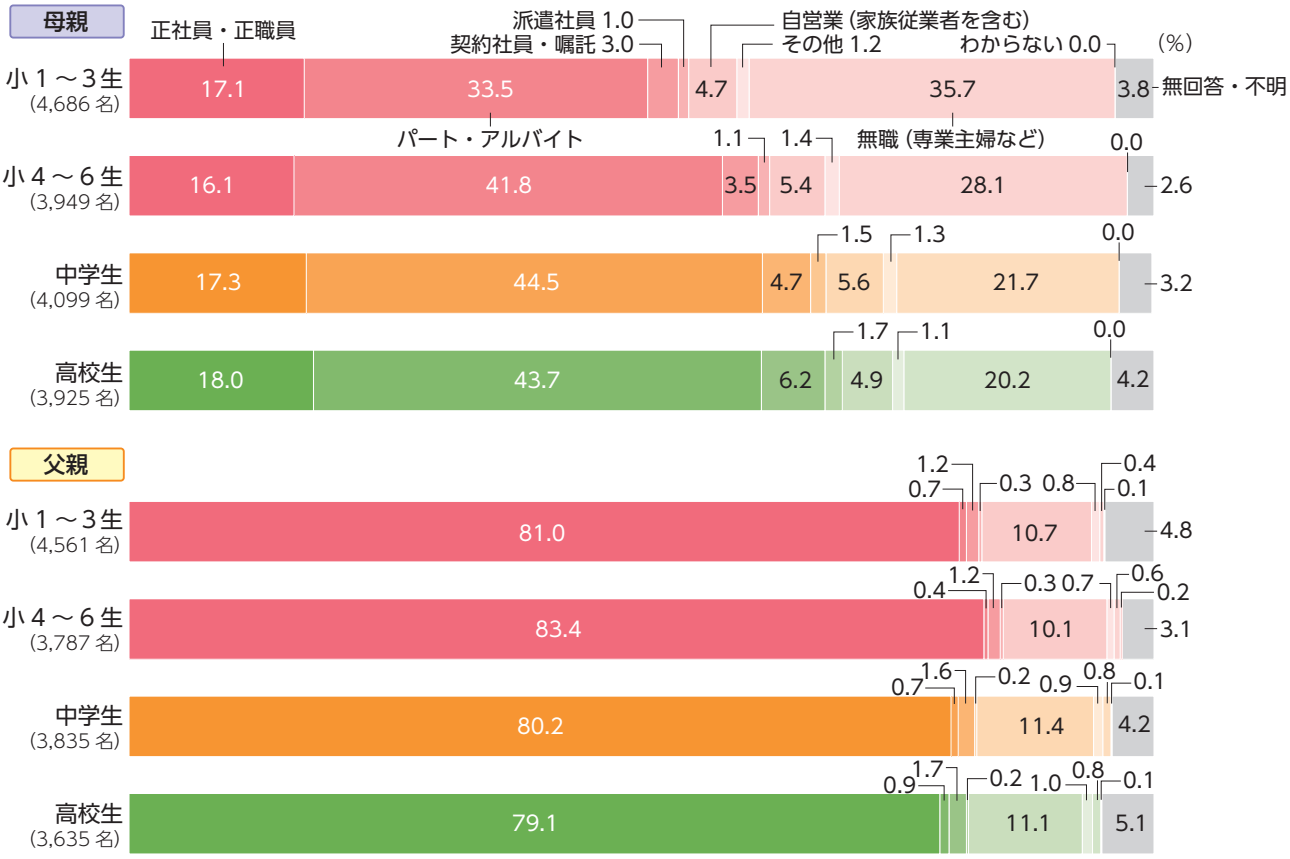
●保護者（回答者）と子どもとの続柄（学校段階別）



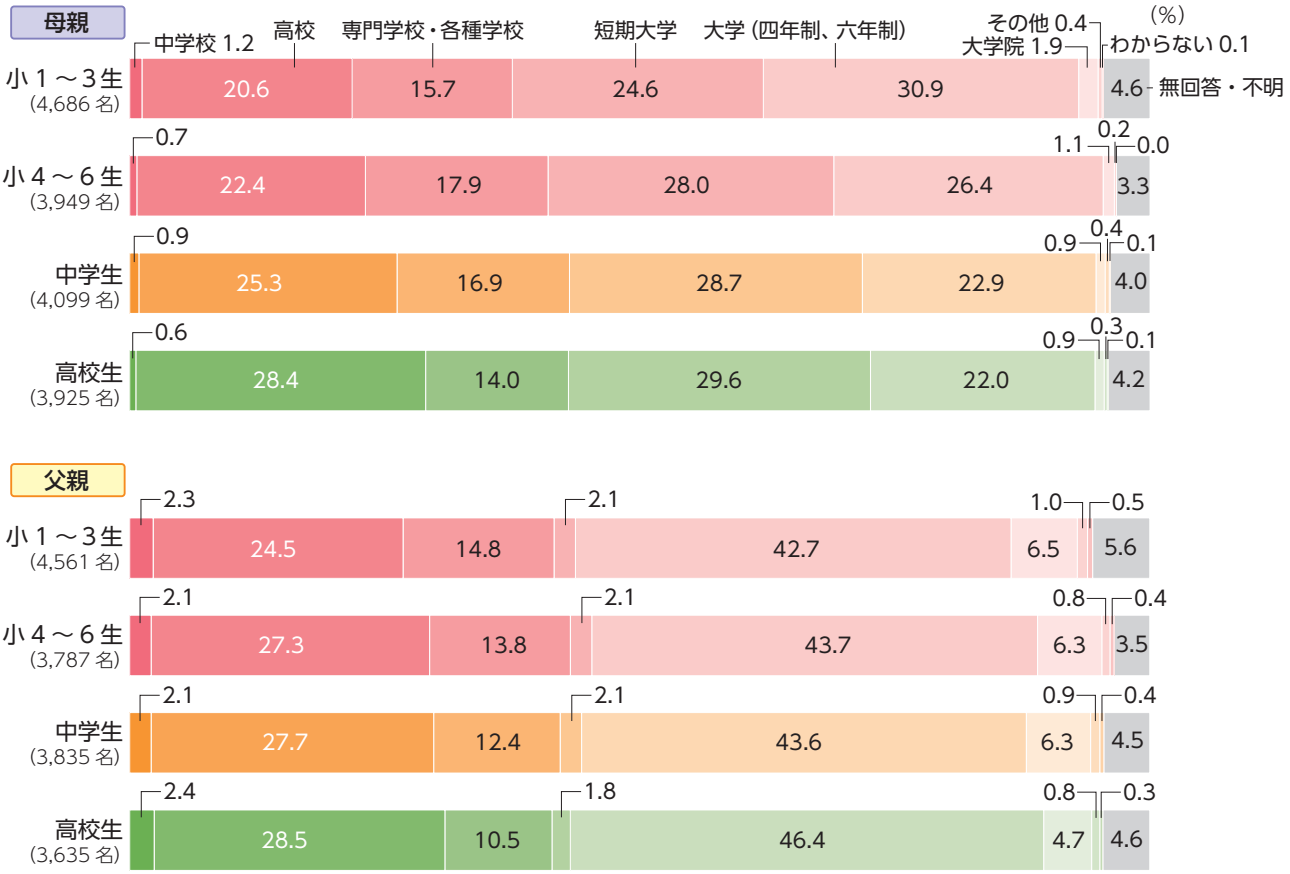
注 「その他」は「祖母」「祖父」「その他」の%。

基本属性

●保護者の就業状況



●保護者の最終学歴



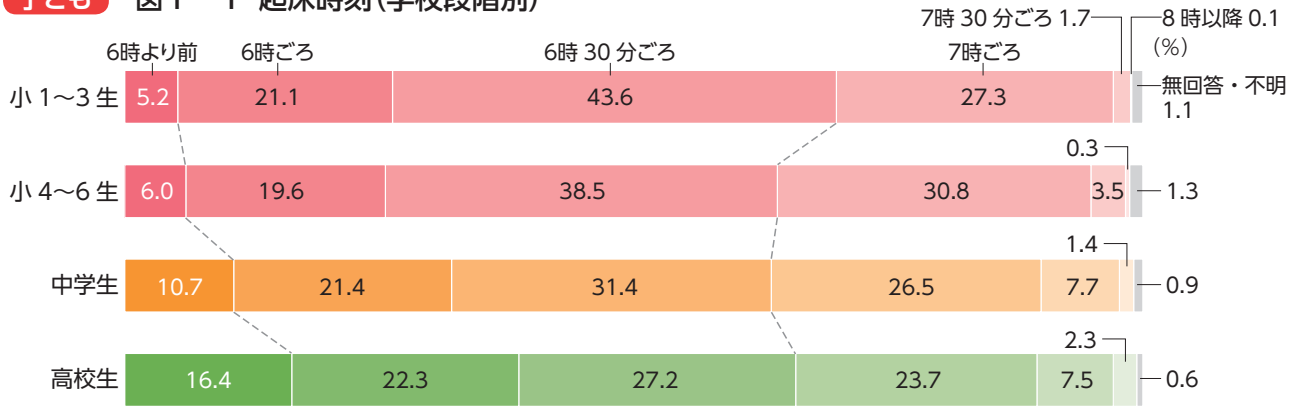
注　保護者の就業状況と最終学歴は、本人と配偶者についての回答をもとに算出。配偶者が「いない」および無回答・不明の場合は除いている。

学校段階が上がるにつれて、就寝時刻は遅くなり、起床時刻は早くなる

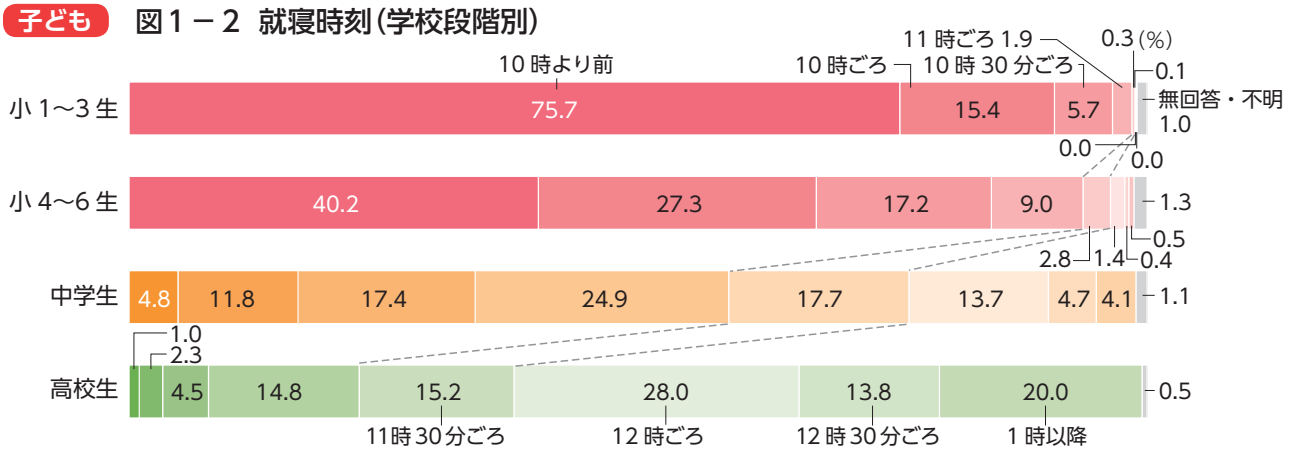
小学生の９割以上は「11時ごろ」までに就寝するが、中学生では約６割、高校生では約２割程度に減少し、高校生の約６割は「12時ごろ」以降に就寝している。一方、起床時刻が「6時より前」なのは中学生11％、高校生16％である。「テレビやDVDを見る」時間は小４～６生がもっとも長く（1時間35分）、高校生になると「携帯電話やスマートフォンを使う」（1時間36分）、「音楽を聴く」（55分）の時間が長くなる。本、マンガや雑誌、新聞などの活字を読む時間はどの学校段階でも短い。

Q ふだん（学校がある日）の「朝、起きる時間」と「夜、寝る時間」はだいたい何時ごろですか。

子ども　図１－１　起床時刻（学校段階別）



子ども　図１－２　就寝時刻（学校段階別）



Q あなたはふだん（学校がある日）、次のことを、1日にどれくらいの時間やっていますか。（学校の中でやる時間は除いてください。）

子ども　表１－１　メディアの利用時間（学校段階別／平均時間）

	テレビや DVD を見る	テレビゲームや携帯ゲーム機で遊ぶ	携帯電話やスマートフォンを使う	パソコンやタブレットを使う	音楽を聴く	本を読む	マンガや雑誌を読む	新聞を読む
小１～３生	1 時間 22 分	27 分	－	9 分	－	16 分	7 分	1 分
小４～６生	1 時間 35 分	44 分	11 分	16 分	11 分	22 分	17 分	2 分
中学生	1 時間 24 分	47 分	44 分	28 分	32 分	20 分	17 分	2 分
高校生	1 時間 10 分	40 分	1 時間 36 分	21 分	55 分	15 分	14 分	3 分

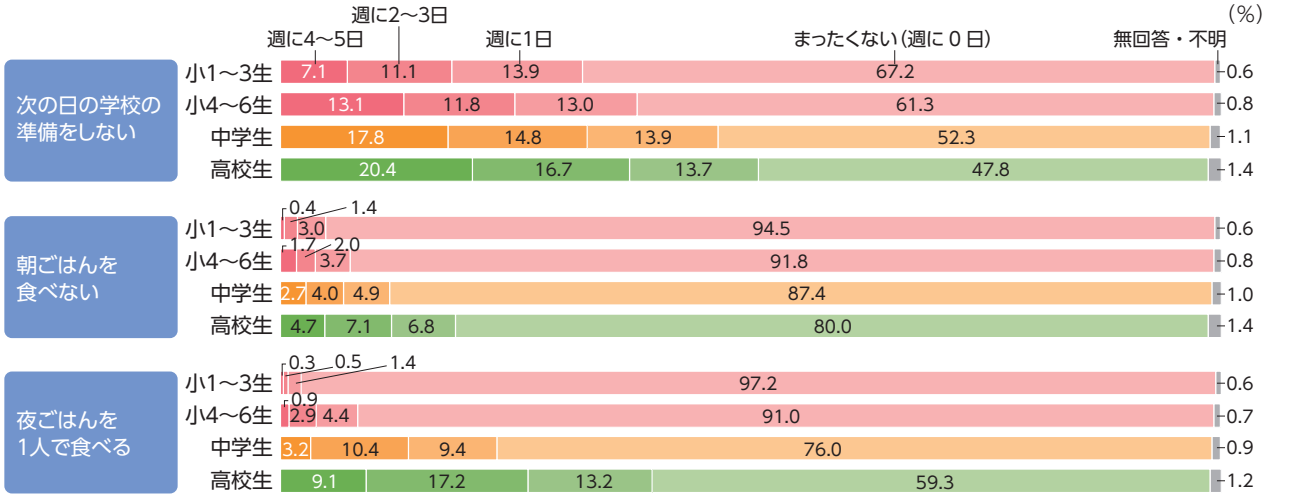
注１ 小１～３生は保護者の回答（図1-1、2、表1-1）。
注２ 「8時以降」は「8時ごろ」「8時よりあと」の％（図1-1）。
注３ 「1時以降」は「1時ごろ」「1時30分ごろ」「2時ごろ」「2時よりあと」の％（図1-2）。
注４ 平均時間は「しない」を0分、「5分」を5分、「4時間より多い」は300分のように置き換え、無回答・不明を除いて算出した（表1-1）。
注５ 「携帯電話やスマートフォンを使う」「音楽を聴く」は小１～３生の保護者には尋ねていない（表1-1）。

高校生の４人に１人は「夜ごはんを１人で食べる」ことが週に２～３日以上ある

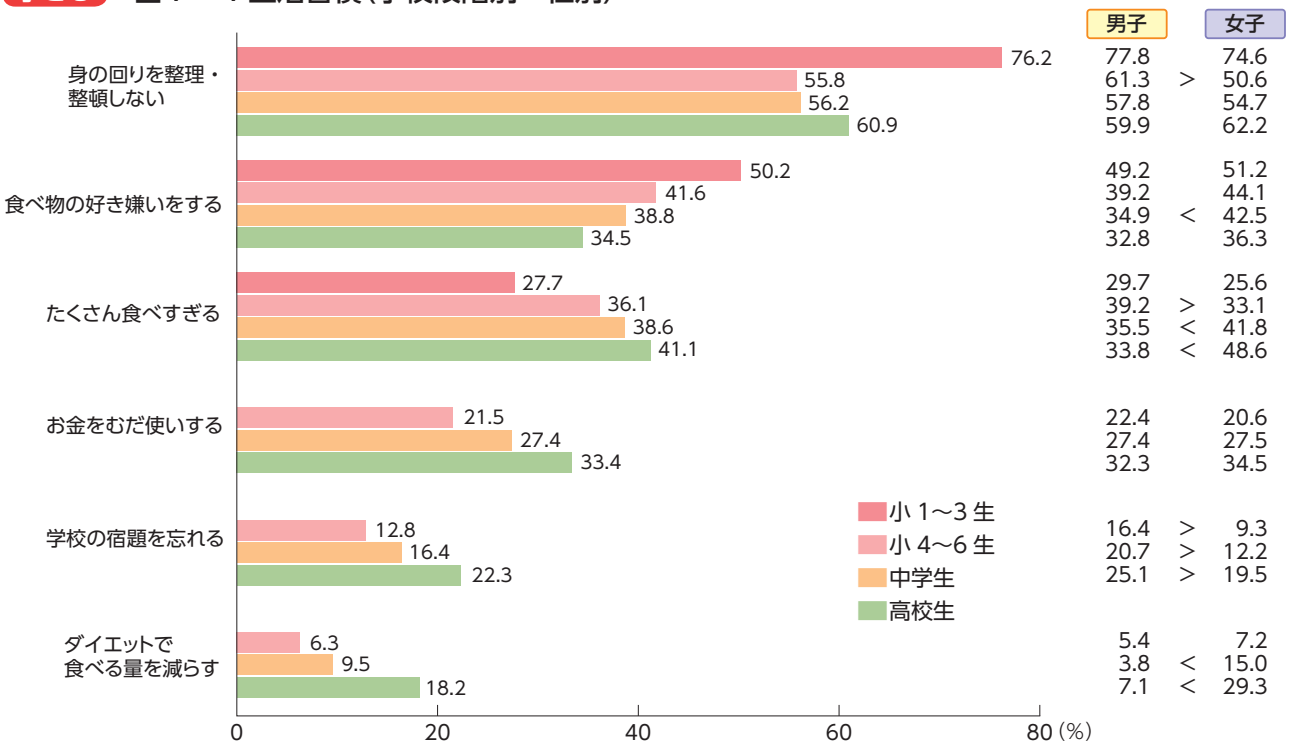
学校段階が上がるほど、ふだんの生活や食生活に乱れがみられるようになる。また、中学生と高校生の女子では「たくさん食べすぎる」「ダイエットで食べる量を減らす」ことが「ある」（「よくある」＋「ときどきある」、以下同様）の割合が男子よりも高く、「たくさん食べすぎる」は４割台、「ダイエットで食べる量を減らす」は高校生女子で約３割である。

Q ふだんの生活の様子について、次のようなことがどれくらいありますか。

子ども　図１－３ 生活習慣（学校段階別）



子ども　図１－４ 生活習慣（学校段階別・性別）



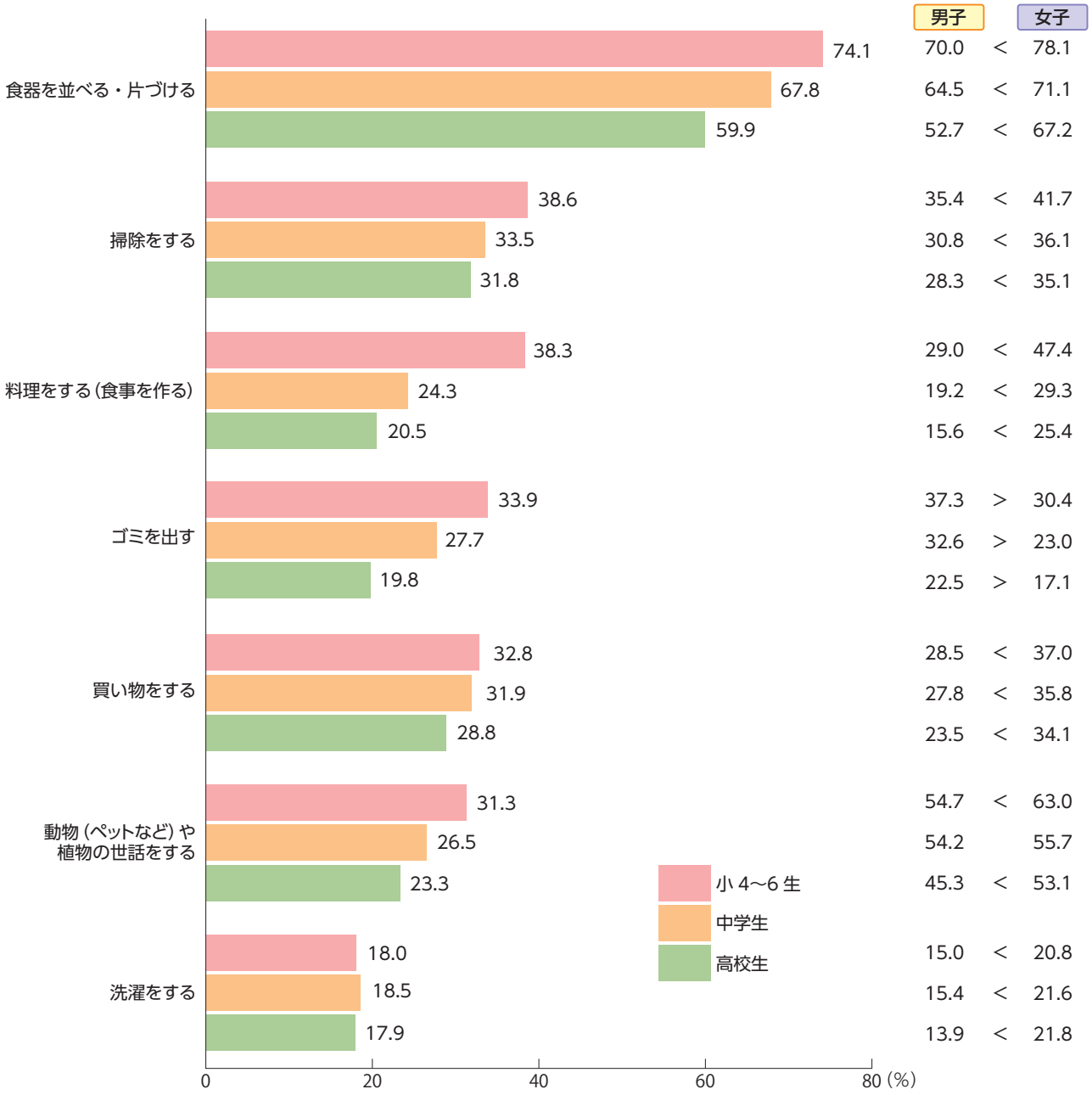
注１　小１～３生は保護者の回答（図1-3、4）。
注２「家族に朝起こしてもらう」「夜ごはんを食べない」は省略した（図1-3）。
注３「よくある」＋「ときどきある」の%（図1-4）。
注４「歯をみがかない」「インターネット・SNSのルールやマナーを守らない」「学校のきまりをやぶる」は省略した（図1-4）。
注５「お金をむだ使いする」「学校の宿題を忘れる」「ダイエットで食べる量を減らす」は小１～３生の保護者には尋ねていない（図1-4）。
注６　性別によって５ポイント以上差がある場合に＜＞をつけた（図1-4）。

女子の方が家の仕事や手伝いをよくしているが、「ゴミ出し」だけは男子の割合が高い

家の仕事や手伝いをする割合がもっとも高いのは小４～６生で、「洗濯をする」を除いて、学校段階が上がるほどお手伝いをしなくなる。また、どの学校段階でも「食器を並べる・片づける」の割合がもっとも高く、「する」（「よくする」＋「ときどきする」）と答えたのは小４～６生女子の78%、男子の70%にのぼっている。多くの項目で女子の方がお手伝いをする傾向にあるが、「ゴミを出す」だけはどの学校段階でも男子の方が高い。

Q あなたは、次のような家の仕事やお手伝いをどれくらいしていますか。

子ども　図１－５　家の仕事やお手伝いの様子（学校段階別・性別）



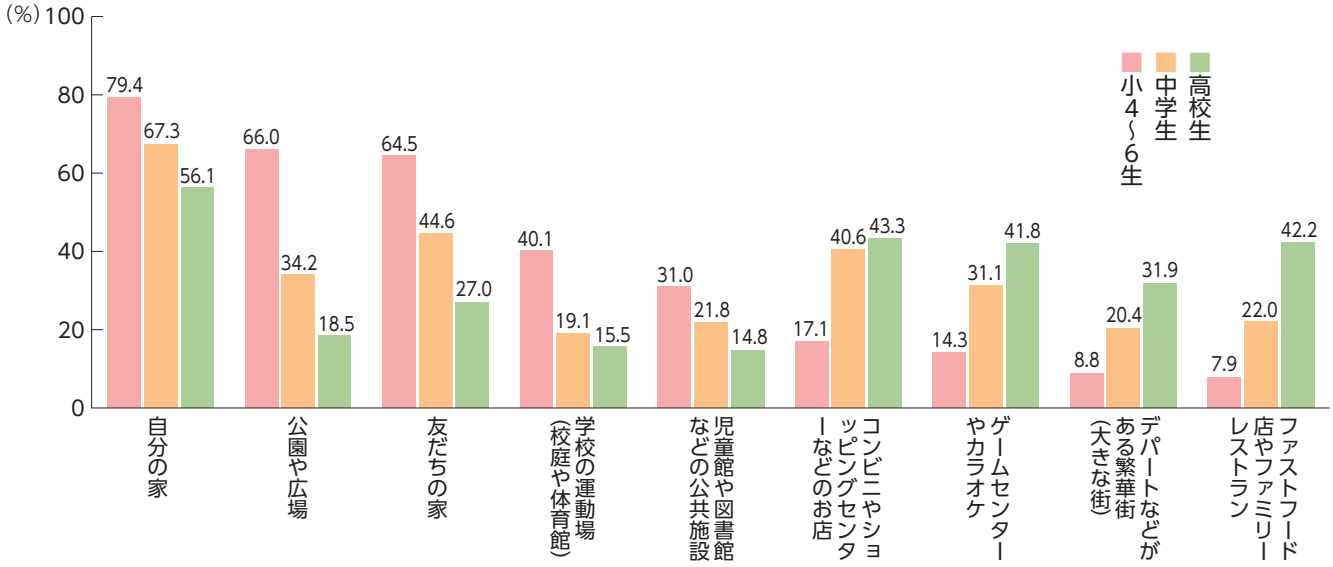
注１「よくする」＋「ときどきする」の%。
注２「動物（ペットなど）や植物の世話をする」は「いない（ない）」を含めて算出した。
注３ 性別によって５ポイント以上差がある場合に<>をつけた。

学校段階が上がると、身近な場所だけでなく、お店や街で遊ぶようになる

小4～6生は「自分の家」「公園や広場」「友だちの家」など身近な場所で遊んでいるが、高校生は「コンビニやショッピングセンターなどのお店」「ファストフード店やファミリーレストラン」「ゲームセンターやカラオケ」で遊ぶという回答が4割を超える。また、学校段階が上がると、「屋外の遊び」より「屋内の遊び」を、「みんなで楽しむ遊び」より「一人で楽しむ遊び」が「好き」という回答が増える。

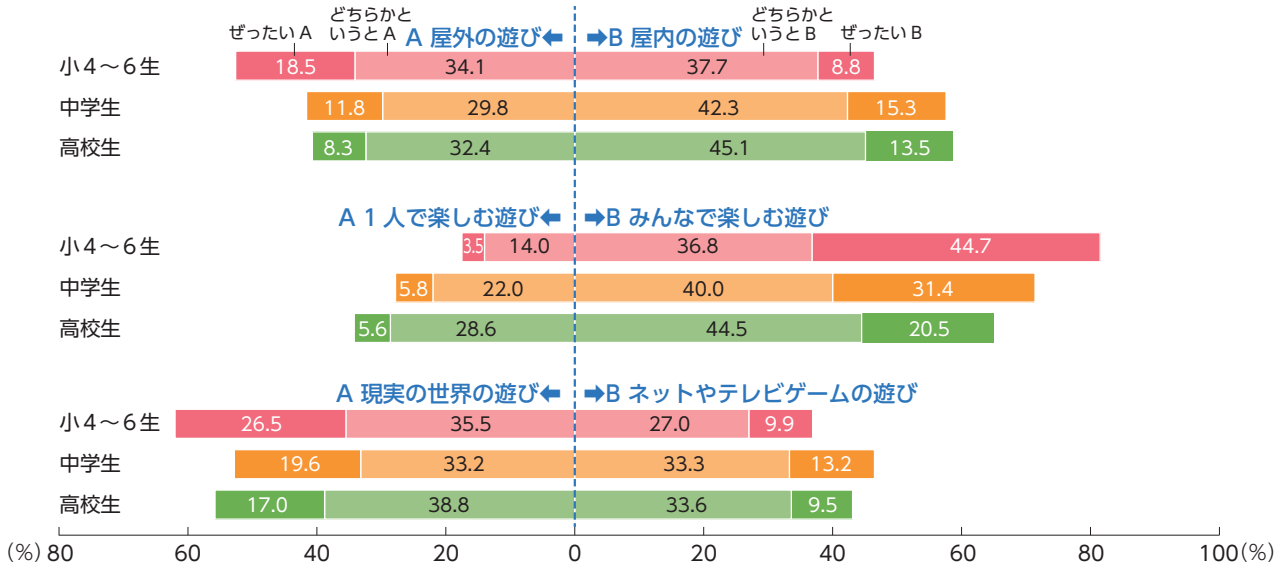
Q あなたは、放課後や休日に、次のような場所で遊ぶことがどれくらいありますか。
（自分1人で遊ぶときも含めてください。）

子ども　図1－6　放課後や休日の遊び場（学校段階別）



Q 遊びの種類を次のようにAとBの2タイプにわけるとしたら、あなたはどちらのタイプの遊びが好きですか。

子ども　図1－7　好きな遊びのタイプ（学校段階別）



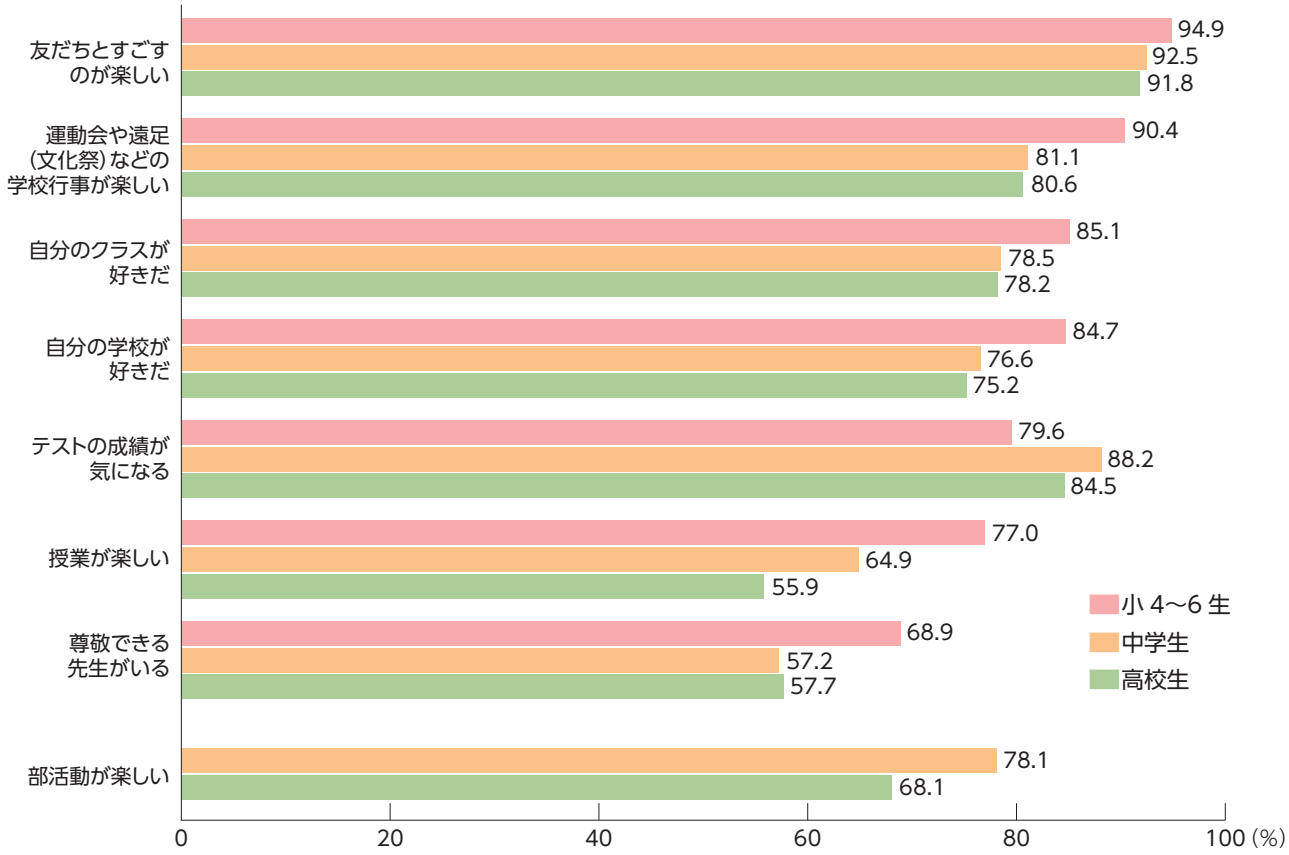
注1 「よく遊ぶ」＋「ときどき遊ぶ」の％（図1-6）。
注2 「学校の教室」「自然のあるところ（海や山、川、森など）」「習い事や学習塾の教室」は省略した（図1-6）。
注3 無回答・不明は示していない（図1-7）。
注4 「決まった友だちとの遊び／いろいろな友だちとの遊び」「わくわくする遊び／のんびりできる遊び」「身体を使った遊び／頭を使った遊び」「ルールが決まっている遊び／自由にやり方を考える遊び」「人と競争する遊び／自分の記録を伸ばす遊び」は省略した（図1-7）。

8～9割弱の子どもが「テストの成績が気になる」と感じている

「授業が楽しい」と回答する割合（「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」、以下同様）は学校段階が上がるほど低くなる。また、「運動会や遠足（文化祭）などの学校行事が楽しい」「自分のクラスが好きだ」「自分の学校が好きだ」「尊敬できる先生がいる」の割合は小学生から、中学生にかけて低くなる。一方で、どの学校段階でも約8～9割弱が「テストの成績が気になる」と回答している。

Q 学校生活について、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

子ども　図2－1　学校生活について（学校段階別）



Q あなたはふだん（学校がある日）、次のことを、1日にどれくらいの時間やっていますか。
（学校の中でやる時間は除いてください。）

子ども　表2－1　学習時間（学校段階別／平均時間）

	学校の宿題をする	学校の宿題以外の勉強をする（学習塾の時間を除く）
小1～3生	32分	15分
小4～6生	44分	26分
中学生	49分	35分
高校生	54分	47分

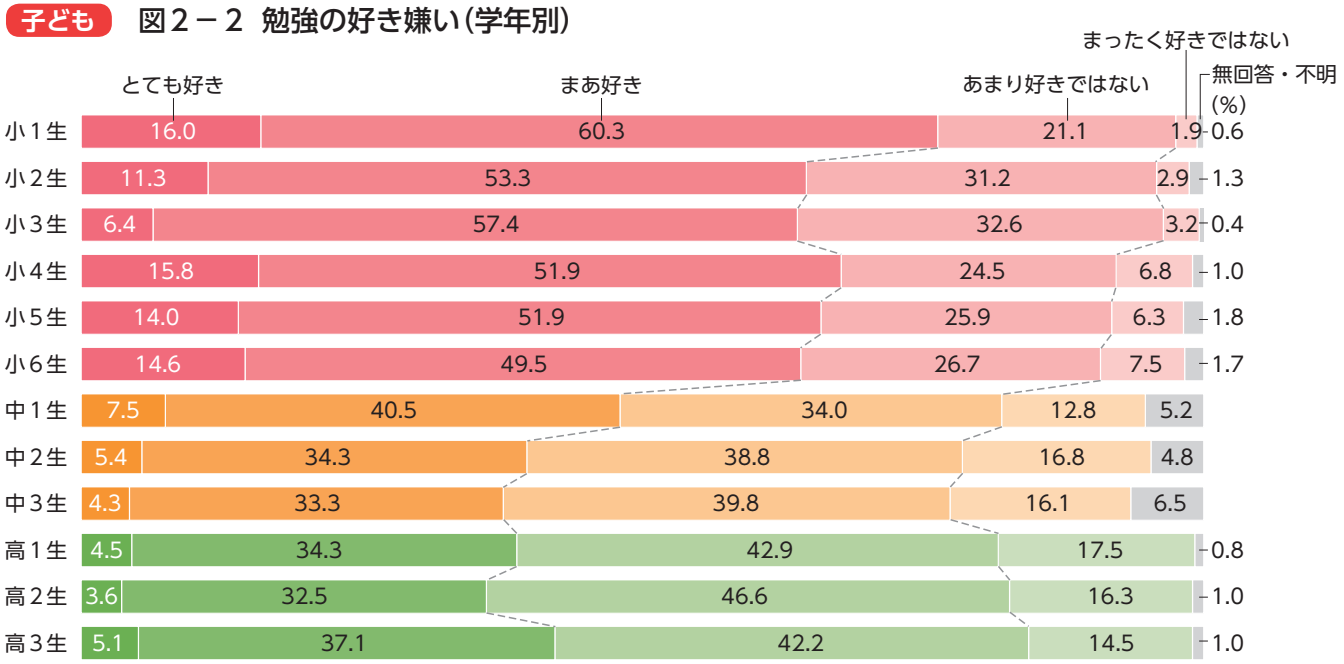
注1「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」の％（図2-1）。
注2「部活動が楽しい」は小4～6生には尋ねていない（図2-1）。
注3 平均時間は「しない」を0分、「5分」を5分、「4時間より多い」は300分のように置き換え、無回答・不明を除いて算出した（表2-1）。
注4 小1～3生は保護者の回答（表2-1）。

自分のことを「理系」だと考える小４生は５割だが、学年が上がるにつれて減少し、高２・３生では「文系」と思う子どものほうが多くなる

小学生の６割以上が勉強を「好き」（「とても好き」＋「まあ好き」）と答えているが、中学生や高校生では大幅に減少している。中２生以上は勉強を「とても好き」が５％前後で、「まったく好きではない」が15％前後である。また小学生のうちは自分のことを「理系」（「どちらかといえば理系」＋「はっきり理系」）だと認識する子どもの方が多く、小４～５生では半数近い。しかし、学年が上がると「理系」が減少して「文系」が増加し、高２・３生では「文系」が「理系」を上回る。

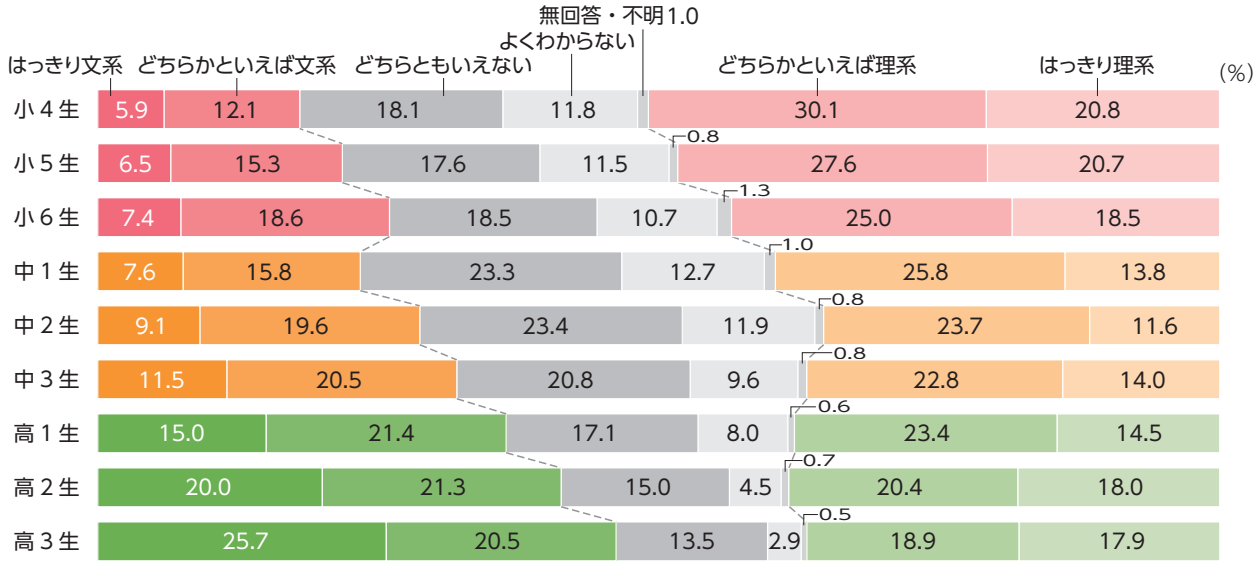
Q あなたは「勉強」がどれくらい好きですか。

子ども　図２－２　勉強の好き嫌い（学年別）



Q あなたは自分のことを「文系」だと思いますか、それとも「理系」だと思いますか。
（「文系」とは国語や社会が得意な人、「理系」とは算数・数学や理科が得意な人を指します。）

子ども　図２－３　文系か理系かの自己認識（学年別）



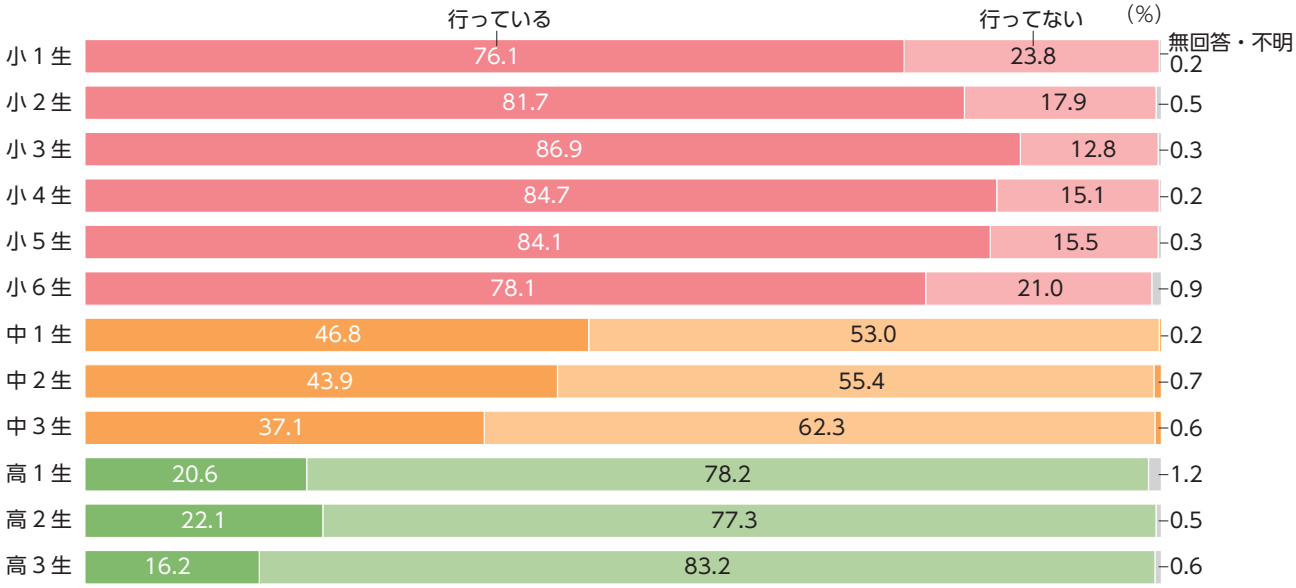
注　小１～３生は保護者の回答（図2-2）。

習い事やスポーツクラブに行く子どもは、小学生で８割前後、中学生で４割前後、高校生で２割前後

習い事やスポーツクラブに行く子どもの割合は、小１生から小３生にかけて高くなり、その後はおおむね学年が上がるにつれて低くなる傾向がある。とくに小６生(78.1%)と中１生(46.8%)の差が大きい。習い事の種類別でみると、スポーツ、文化活動を問わず、中学生・高校生は小学生より「行っている」割合が低いが、とくに「スイミング」などのスポーツにおいて顕著に低い。

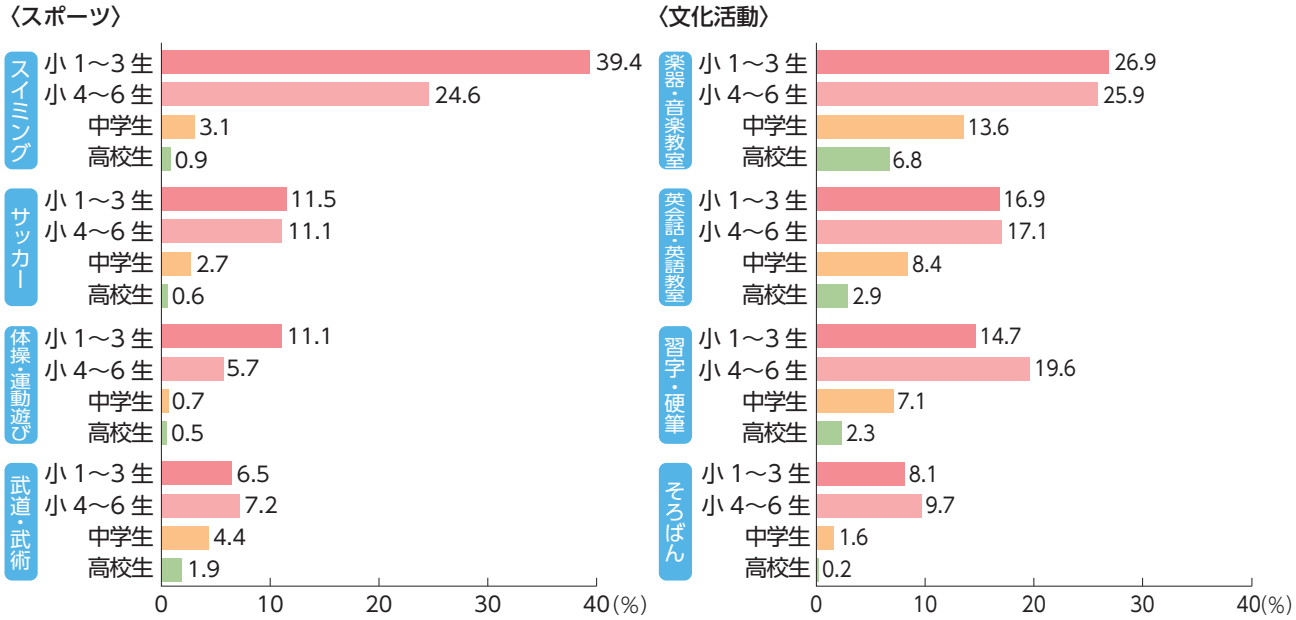
Q お子様は現在、学校外の習い事やスポーツクラブに行っていますか。
(部活動、学習塾や学習教室は除きます。)

保護者　図２－４　習い事やスポーツクラブに行っている割合(学年別)



Q お子様が、現在、習っているものすべてに○をつけてください。

保護者　図２－５　習い事の種類(学校段階別)



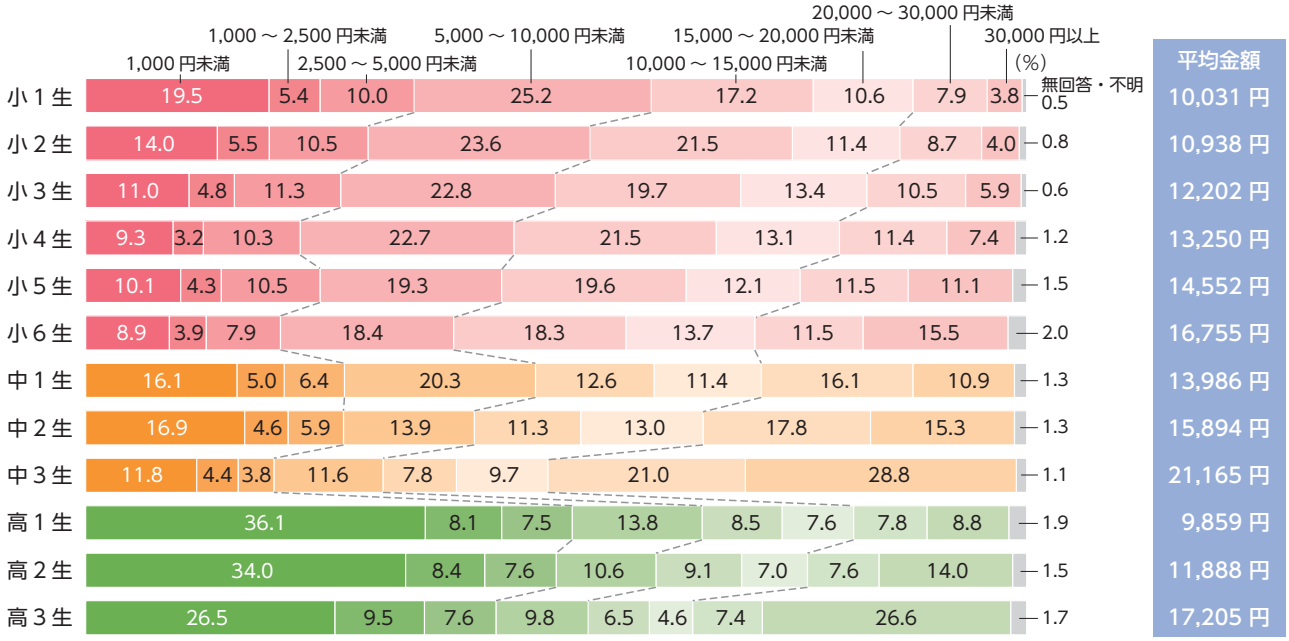
注１ 複数回答(図2-5)。
注２ 習い事やスポーツクラブに「行っていない」と無回答・不明を含めて算出した(図2-5)。
注３ 小１生～高３生全体で、割合の高い順に８項目を掲載した(図2-5)。

学校外の教育費は中３生がもっとも高い

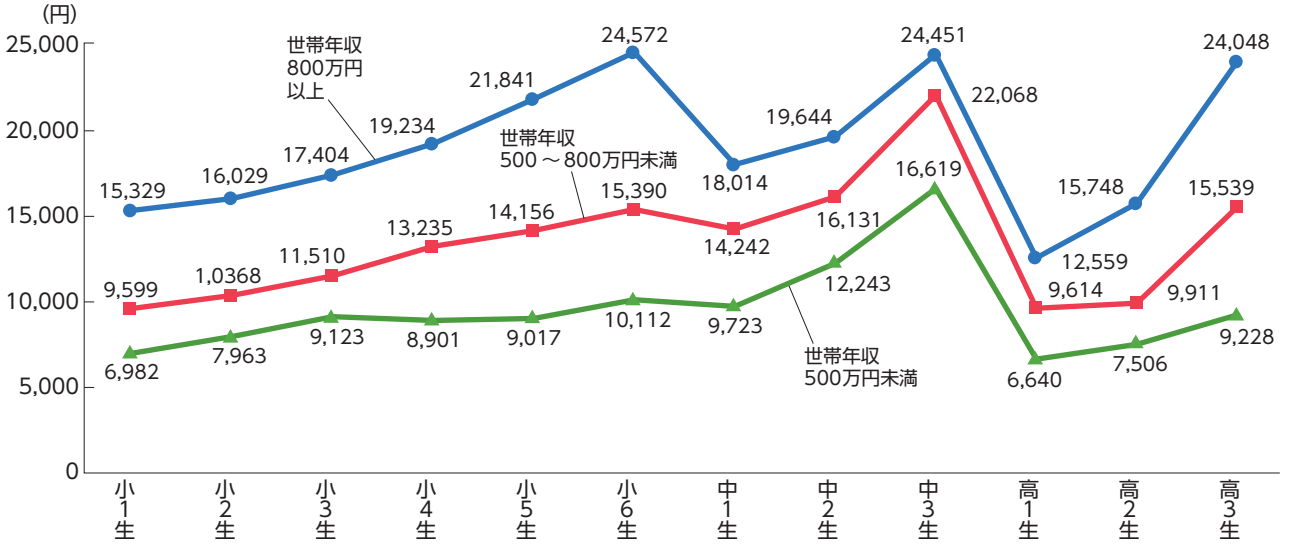
１人あたりの教育費（授業料を除く）は、どの学校段階でも学年が上がるほど金額も高くなる。しかし、小６生より中１生が低く、中３生より高１生が低く、学校段階が変わるときに教育費が低くなる。すべての学年で教育費がもっとも高いのは中３生である。また、教育費の平均金額を世帯年収別でみると、世帯年収が高いほど教育費は高い。とくに世帯年収による差が大きい学年は小６生と高３生であり、中学受験や大学受験にかける教育費が世帯年収によって異なっている可能性がある。

Q ご家庭の教育費はどれくらいですか。お子様１人の金額を、月平均でお答えください。
（習い事や学習塾の費用、教材費などの合計。学校の授業料は除きます。）

保護者 図２－６ 子ども１人あたりの教育費（学年別／平均金額）



保護者 図２－７ 子ども１人あたりの教育費（学年別・世帯年収別／平均金額）



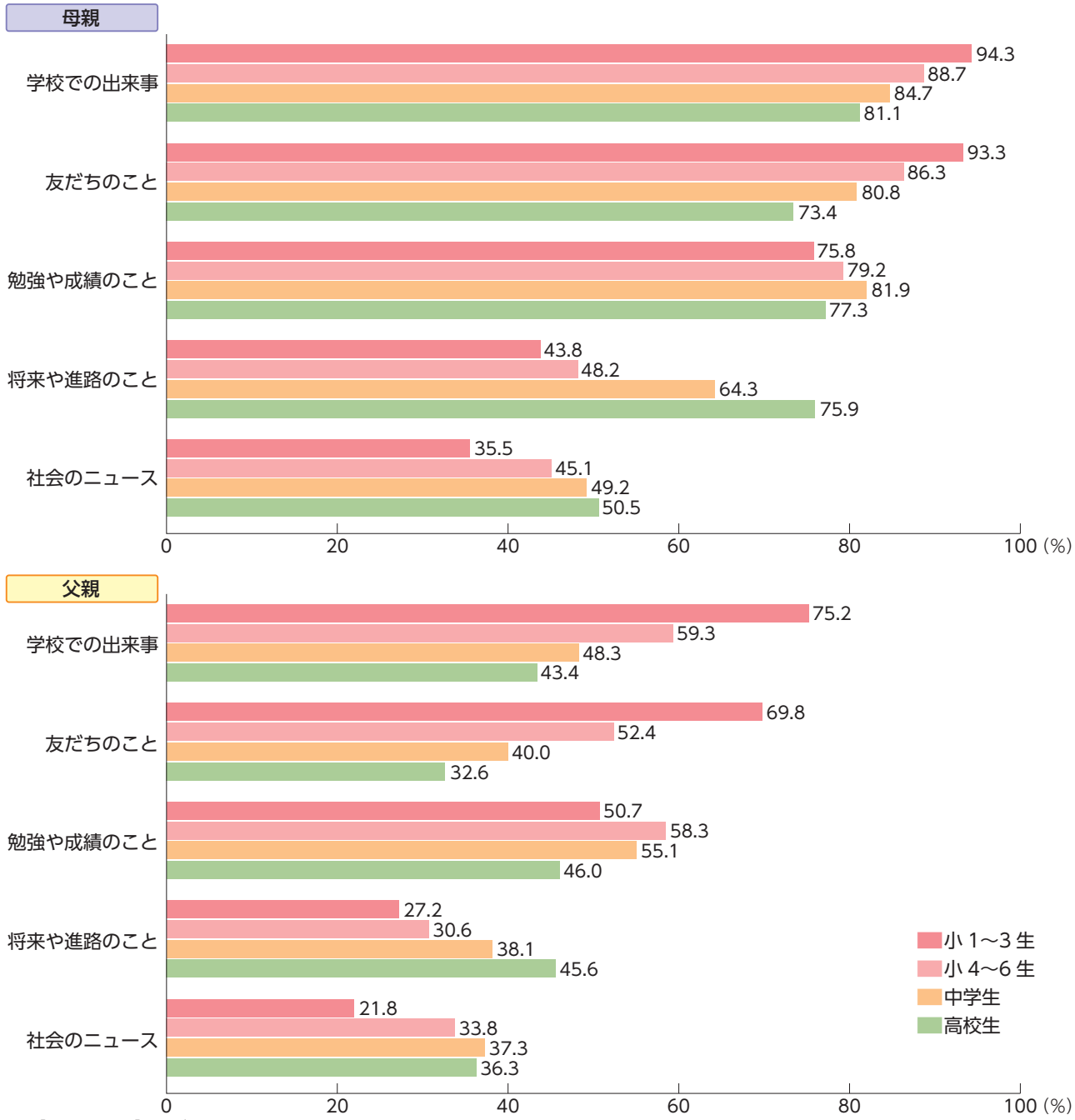
注１「30,000円以上」は、「30,000 ～ 40,000円未満」「40,000 ～ 50,000円未満」「50,000円以上」の合計（図2-6）。
注２ 平均金額は「1,000円未満」を500円、「1,000 ～ 2,500円未満」を1,750円、「40,000 ～ 50,000円未満」を45,000円、「50,000円以上」を55,000円のように置き換え、無回答・不明を除いて算出した（図2-6、7）。
注３ 世帯年収は「世帯全体の収入（共働きの場合は夫婦の合計）はどれくらいですか。ボーナスなどを含めて、昨年１年間のだいたいの収入を税込みで教えてください。」と尋ねたもの。「答えたくない」および無回答・不明は除いている（図2-7）。

学校段階が上がるにつれて、親子の会話は「学校」や「友だち」の話題に加えて「将来や進路のこと」も増えてくる

どの学校段階でも父親より母親と会話をしている割合が高い。小学生では身近な「学校での出来事」や「友だちのこと」について話す傾向にあるが、学校段階が上がるにつれて、その割合は低くなり、中学生・高校生では「将来や進路のこと」について話す割合が高くなる。「社会のニュース」については学校段階が上がるにつれて話す割合は高まるが、高校生でも母親とは5割、父親とは3割5分にとどまる。「勉強や成績のこと」は学校段階による変化が小さい。

Q ふだん、お父さんやお母さんと、次のことについてどれくらい話をしますか。

子ども　図3－1　保護者（父母）との会話（学校段階別）



注1「よく話す」＋「ときどき話す」の%。
注2　小1～3生は保護者の回答。

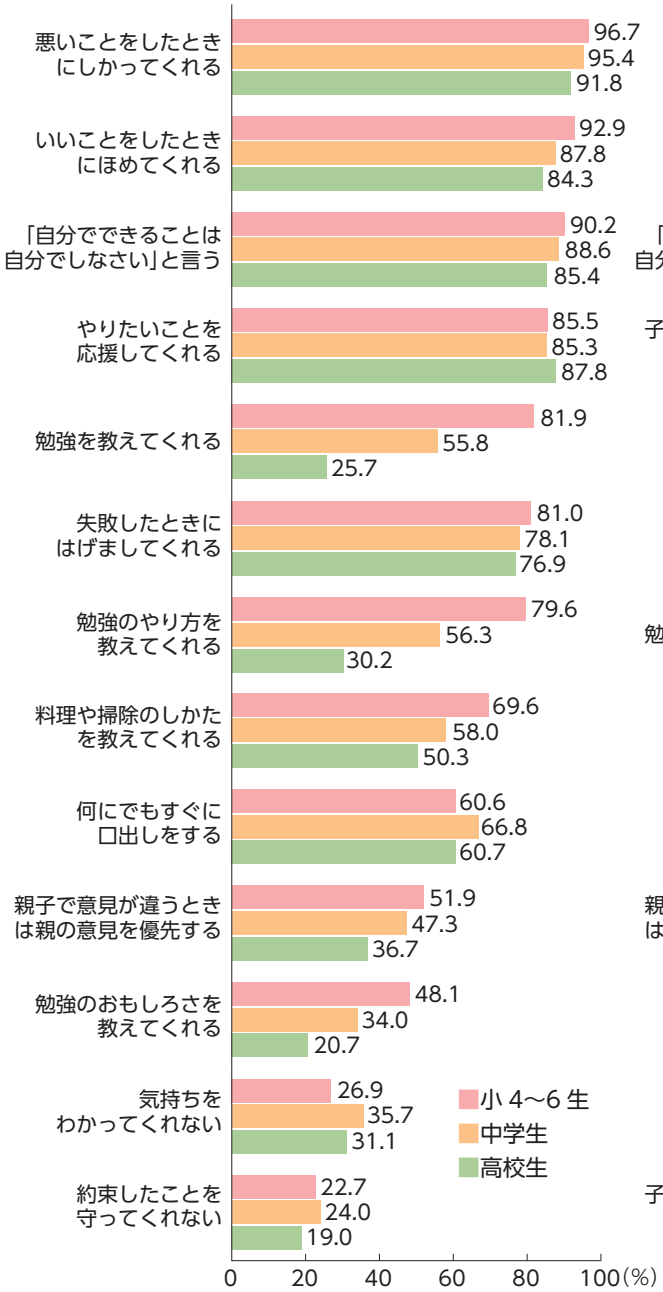
親が思う以上に子どもは親が「勉強を教えてくれる」と感じている

「しかる」「ほめる」「『自分でできることは自分でしなさい』と言う」は、親子とも「あてはまる」(「とてもあてはまる」+「まああてはまる」、以下同様)と回答する割合が高い。しかし、「やりたいことを応援する」「失敗したときにはげます」は、子どもの方が1割程度低い。一方で、勉強関連の3項目(「教える」「やり方を教える」「おもしろさを教える」)は、とくに小学生で子どもの「あてはまる」の割合の方が高く、親が思う以上に子どもは親が勉強を教えてくれると感じている。

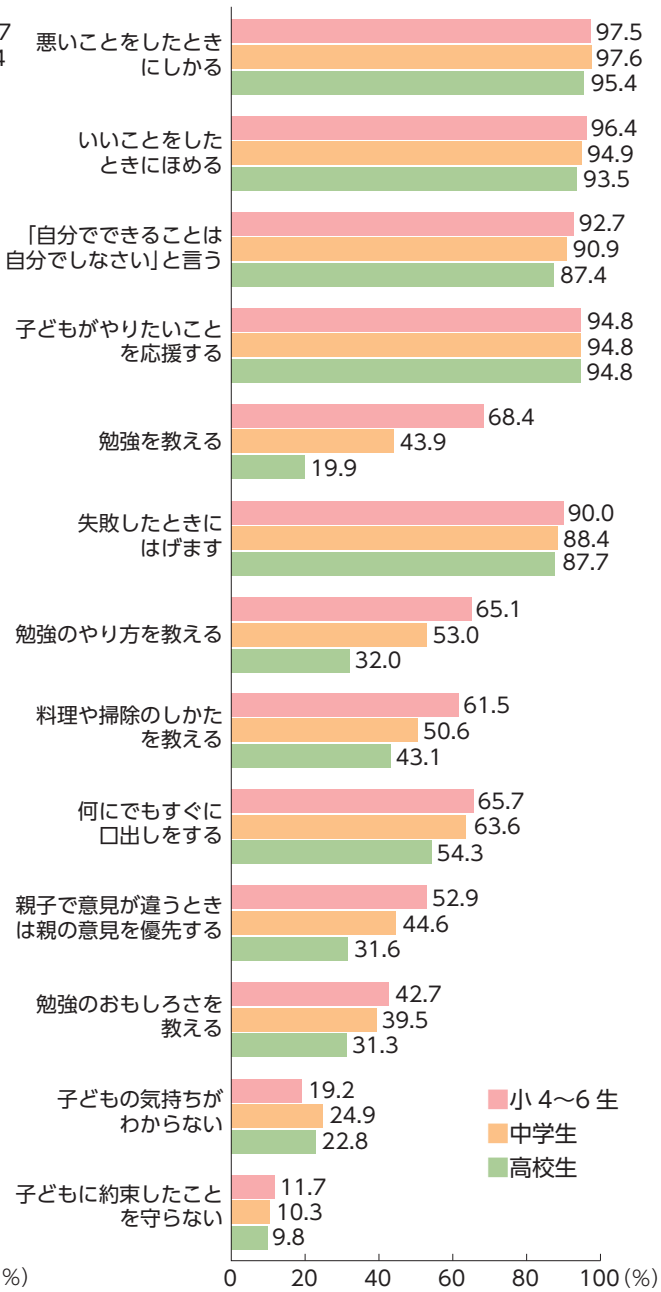
Q お父さんやお母さんについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

Q あなたのお子様に対するかかわりについて、次のことはどれくらいあてはまりますか。

子ども　図3−2　保護者(父母)とのかかわり(学校段階別)



保護者　図3−3　子どもとのかかわり(学校段階別)



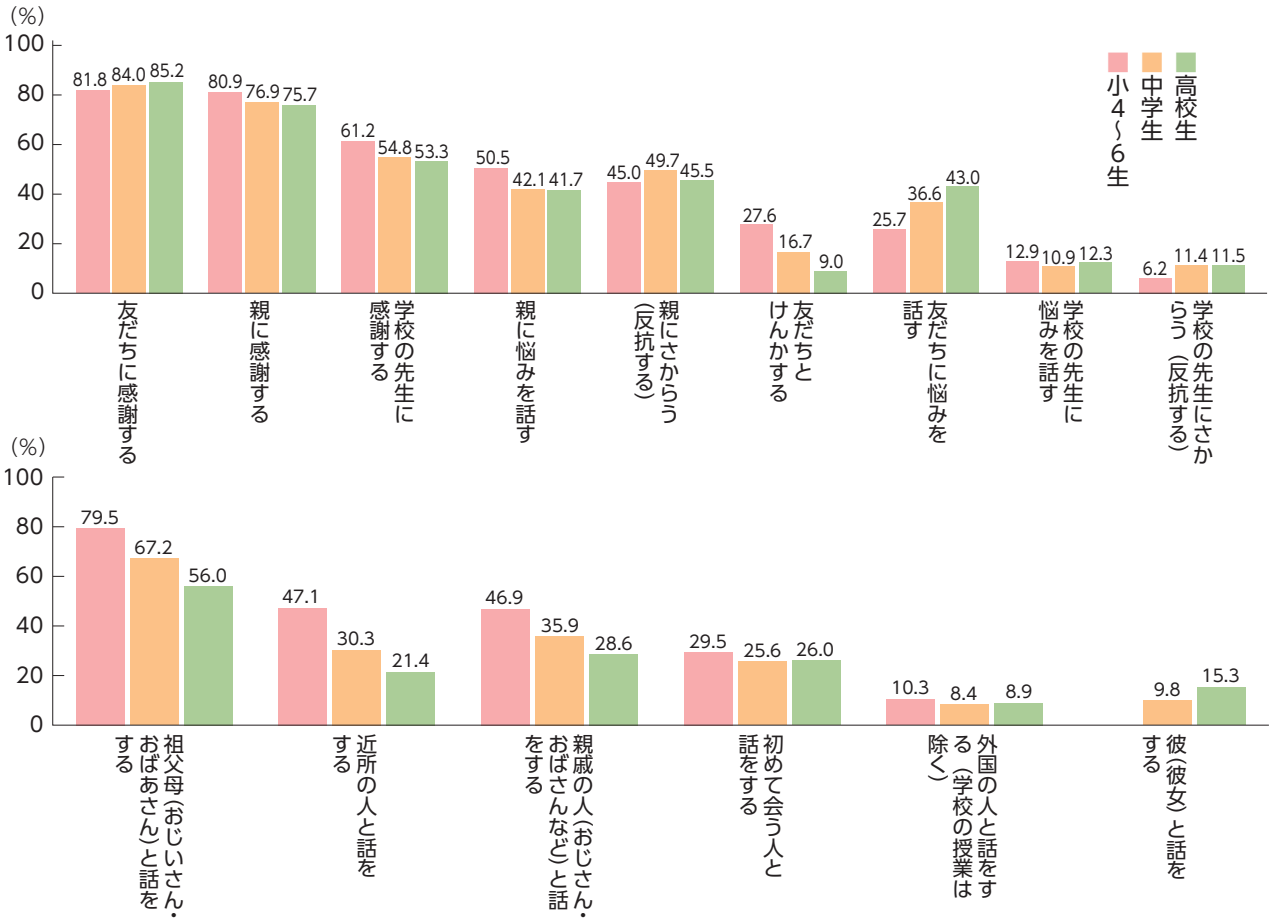
注1「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%(図3-2、3)。
注2「子どもが成長したと感じる」「自分が親として成長したと感じる」は省略した(図3-3)。

中学生・高校生では「友だちに悩みを話す」ことが増え、自分１人ですごす時間が長くなる

友だち・親・先生に「感謝する」割合はどの学校段階でも高く、親・先生に対しては小４～６生でもっとも高い。また、「友だちとけんかする」割合は学校段階が上がると低くなるが、「友だちに悩みを話す」割合は高くなる。一方で、「学校の先生に悩みを話す」「学校の先生にさからう（反抗する）」割合はどの学校段階でも１割前後である。祖父母や近所の人、親戚の人と「話をする」割合は、小学生でもっとも高く、中学生・高校生では低くなる。高校生は「家族とすごす」時間が短くなり、「自分１人ですごす」時間が長くなる。

Q いろいろな人とのかかわりについて、次のようなことがどれくらいありますか。

子ども　図３－４　いろいろな人とのかかわり（学校段階別）



Q あなたはふだん（学校がある日）、次のことを、１日にどれくらいの時間やっていますか。（学校の中でやる時間は除いてください。）

子ども　表３－１　人とすごす時間（学校段階別／平均時間）

	家族とすごす	友だちと遊ぶ・すごす	自分１人ですごす
小１～３生	３時間 26 分	59 分	11 分
小４～６生	３時間 50 分	１時間 14 分	36 分
中学生	２時間 57 分	54 分	１時間 15 分
高校生	２時間 12 分	50 分	１時間 50 分

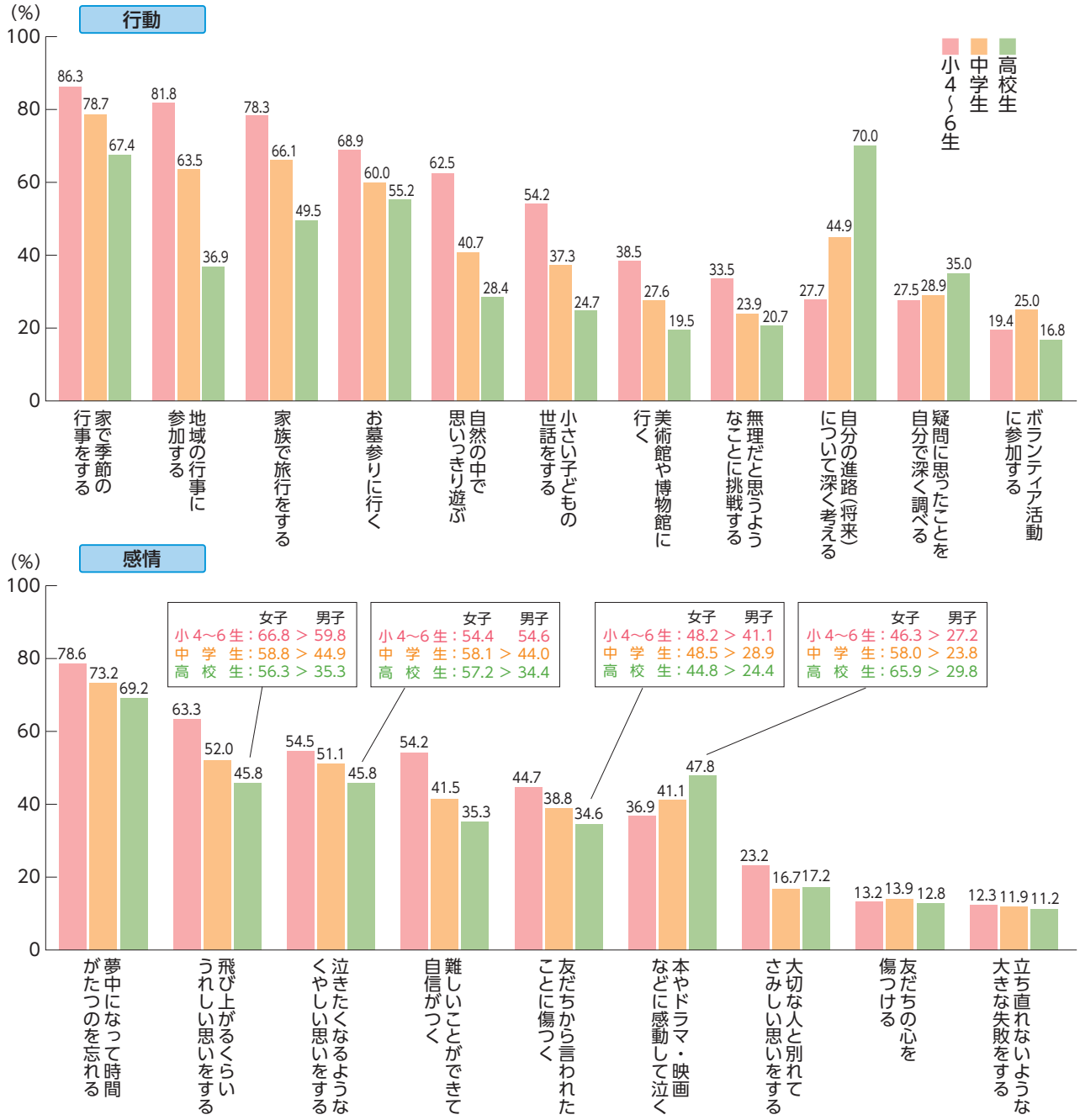
注１「よくある」＋「ときどきある」の％（図3-4）。
注２「彼（彼女）と話をする」は小４～６生には尋ねていない（図3-4）。
注３ 平均時間は「しない」を０分、「５分」を５分、「４時間より多い」は300分のように置き換え、無回答・不明を除いて算出した（表3-1）。
注４ 小１～３生は保護者の回答（表3-1）。

行動面や感情面の経験割合は小学生が高い。性別にみると、感情面での経験割合は女子の方が高い

小4～6生は多くの項目で中学生・高校生に比べて経験割合が高く、行動面、感情面ともに幅広い経験をしている。しかし、「自分の進路(将来)について深く考える」「本やドラマ・映画などに感動して泣く」は中学生・高校生の方が高い。性別にみると「飛び上がるくらいうれしい思いをする」「泣きたくなるようなくやしい思いをする」「友だちから言われたことに傷つく」「本やドラマ・映画などに感動して泣く」は女子の方が経験割合が高く、中学生や高校生では男子との差が広がる傾向にある。

Q この1年くらいの間に、あなたは次のようなことを経験しましたか。

子ども　図4－1　1年間の経験(学校段階別)



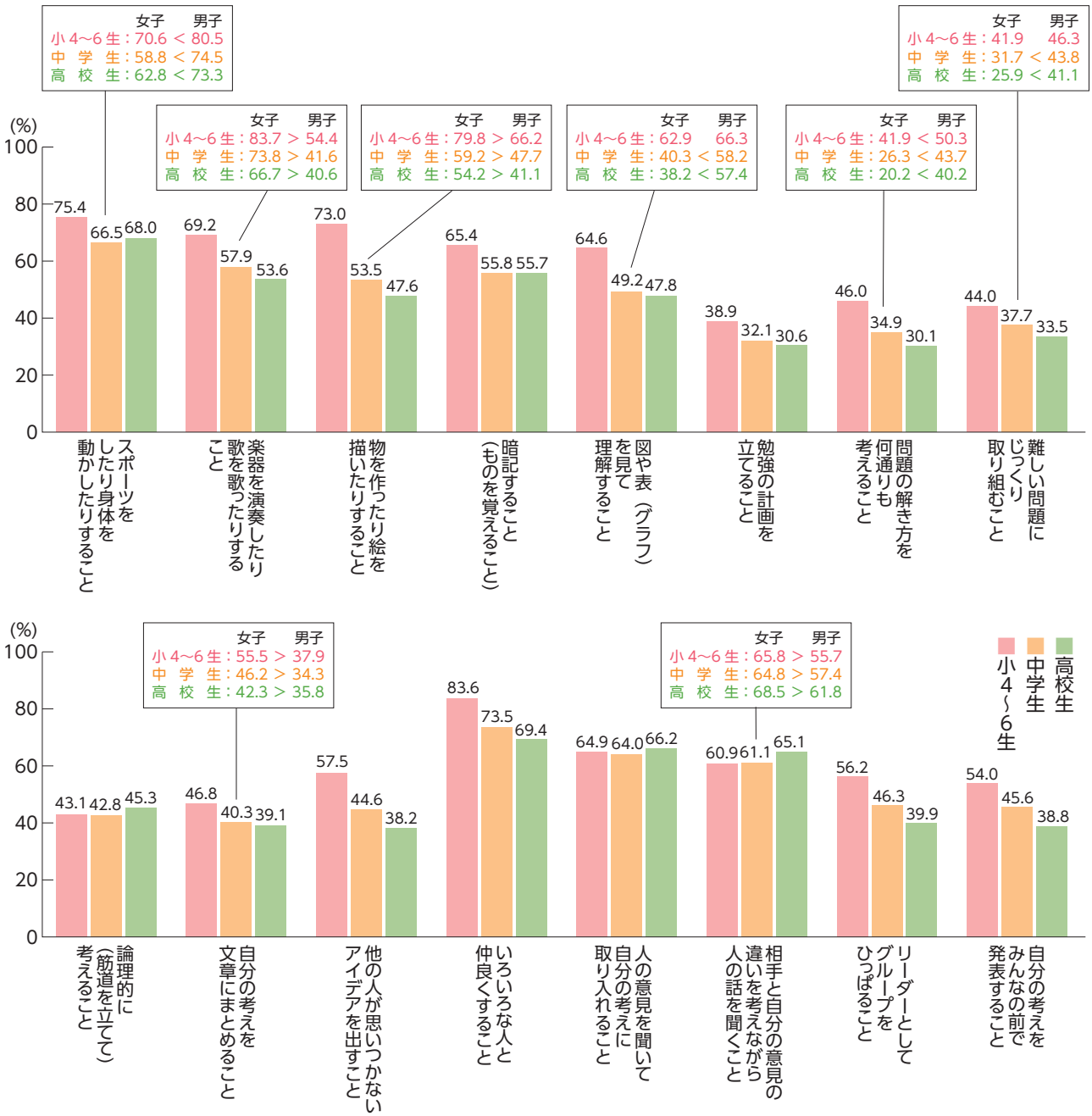
注1　複数回答。
注2　「外国に行く」「お年寄りの世話をする」「親から仕事の楽しさや大変さを聞く」は省略した。
注3　感情面の経験については、いずれかの学校段階で、性別によって10ポイント以上差がある場合に、性別の数値を示した。

学校段階が上がるにつれて、さまざまなことを「得意」と感じる子どもが減る傾向にある

学校段階が上がるにつれて、「暗記」「図表理解」「難問に取り組む」などの学習関連の項目だけでなく、「楽器を演奏」「物を作ったり絵を描く」や「文章にまとめる」「アイデアを出す」「いろいろな人と仲良くする」「みんなの前で発表する」といった項目でも、「得意」と感じる子どもの割合は減る傾向にある。性別で差が大きいものをみてみると、男子が高いのは「スポーツ」「図表理解」「解き方を何通りも考える」「難問に取り組む」、女子が高いのは「楽器を演奏」「物を作ったり絵を描く」「文章にまとめる」「人の話を聞くこと」である。

Q あなたは次のようなことが得意ですか、苦手ですか。

子ども 図5－1 得意・苦手（学校段階別）



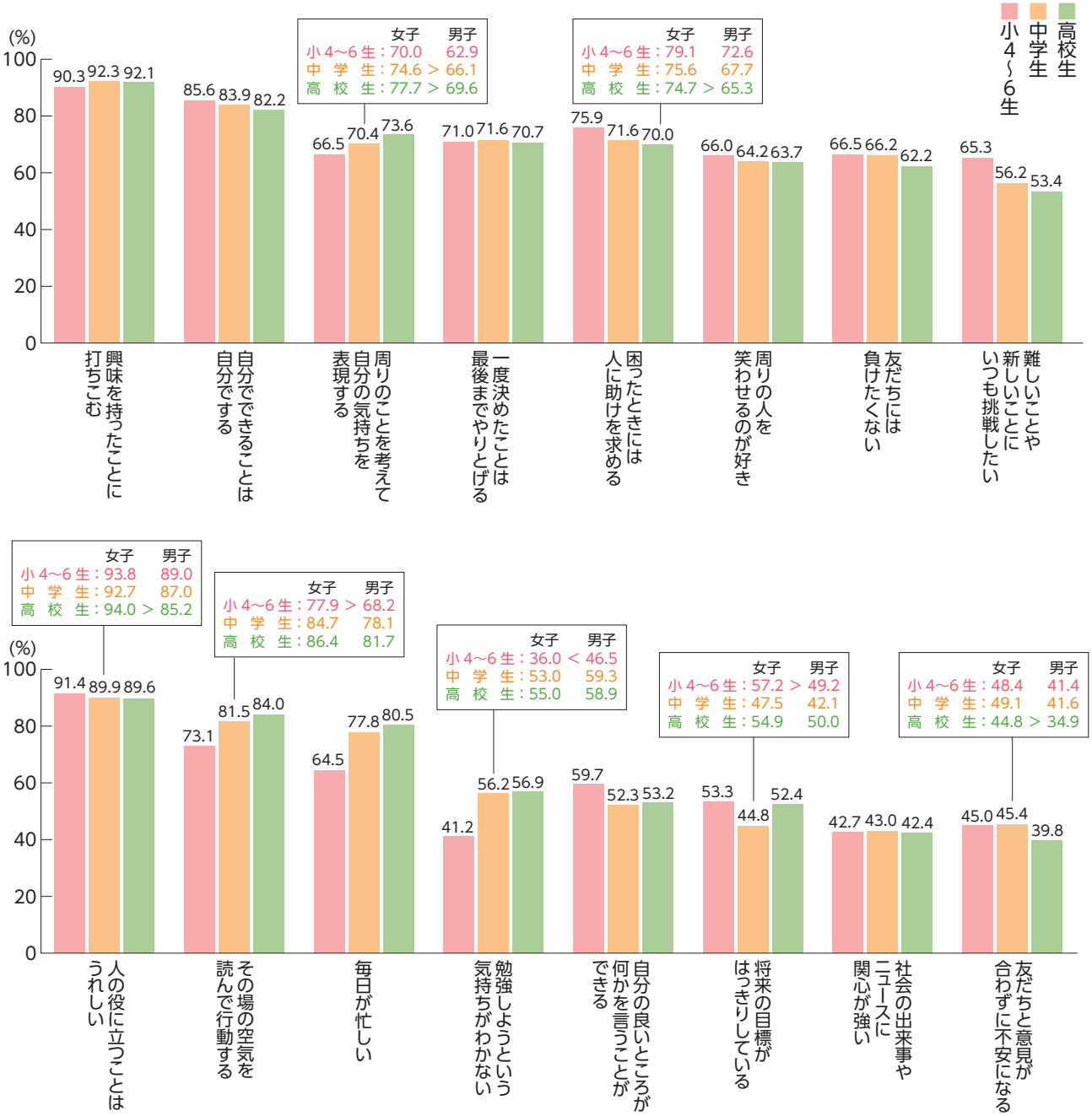
注1 「とても得意」＋「やや得意」の%。
注2 「勉強のやり方を自分で考えること」「わからないことや知らないことを調べること」「いろいろな情報から信頼できるものを選んで使うこと」「自分で決めて行動すること」「グループがまとまるように協力すること」「英語を使って人と話をすること」は省略した。
注3 いずれかの学校段階で、性別によって10ポイント以上差がある場合に、性別の数値を示した。

学校段階が上がるにつれて多忙感が増す一方で、5割以上の中学生・高校生が「勉強しようという気持ちがわかない」と感じている

「勉強しようという気持ちがわかない」「毎日が忙しい」「その場の空気を読んで行動する」に「あてはまる」（「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」、以下同様）と回答した子どもの割合は、小4～6生より中学生・高校生の方が高い。性別でみると、女子の方が「周りのことを考えて自分の気持ちを表現する」「その場の空気を読んで行動する」「友だちと意見が合わずに不安になる」といった人間関係についての項目で、男子よりも「あてはまる」の割合が高い。

Q あなた自身のことについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

子ども　図5－2　自分自身についての認識（学校段階別）



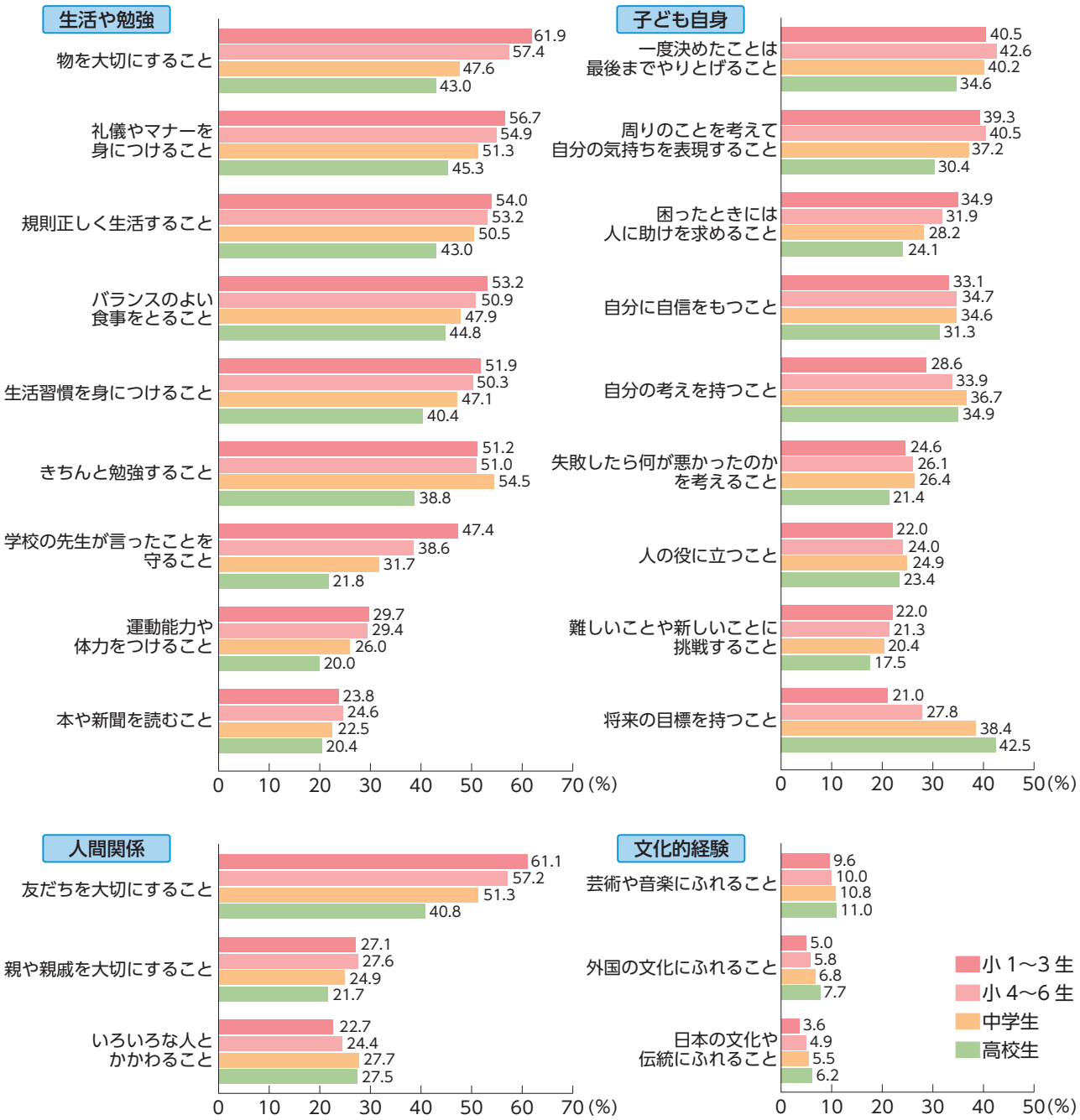
注1　「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」の%。
注2　「失敗しても自信を取り戻せる」「失敗したら何が悪かったのかを考える」「たいていのことは何とかなると思う」「毎日が楽しい」「これからの『日本』がどうなるか不安だ」「入るのが難しいと言われる高校（大学）に入りたい」は省略した。
注3　いずれかの学校段階で、性別によって8ポイント以上高い場合に、性別の数値を示した。

「文化的経験」よりも「生活習慣」や「人間関係」の大切さを伝えている保護者が多い

家庭で子どもに「よく伝えている」ことの割合をみると、小学生では「物を大切にすること」（6割前後）、中学生では「きちんと勉強すること」（5割5分）、高校生では「礼儀やマナーを身につけること」（4割5分）がもっとも高い。また「将来の目標を持つこと」は、学校段階が上がるにつれて、割合が高くなる。子どもの成長に合わせて保護者が重視することは異なっている。しかし、「日本の文化や伝統にふれること」「外国の文化にふれること」の割合はどの学校段階でも1割未満である。

Q 家庭教育の中で、あなたはお子様に、次のことの大切さをどれくらい伝えていますか。

保護者　図6－1　家庭教育の中で伝えていること（学校段階別）



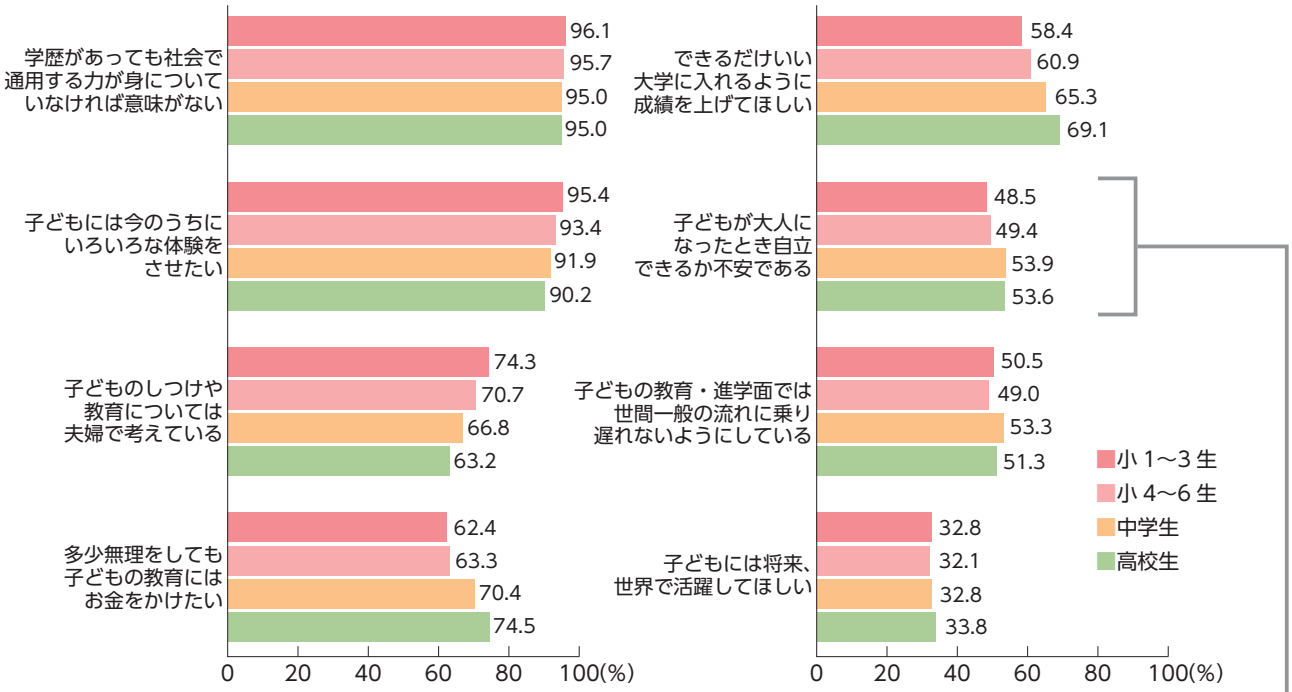
注　「よく伝えている」の%。

5割の保護者が「子どもが大人になったとき自立できるか不安である」と感じている

「子どもが大人になったとき自立できるか不安である」は、どの学校段階でも男子をもつ保護者が女子をもつ保護者より約5～10ポイント高く、男子をもつ保護者は子どもの自立に対して不安が高いようだ。家庭での約束やルールがあるかを尋ねたところ、「携帯電話やスマートフォンの使い方」にルールがある小学生は4割前後、中学生・高校生では5割台となっている。「勉強の時間」については、小学生の保護者の6割以上がルールが「ある」と回答し、学習習慣を重視する保護者の姿勢がうかがえる。

Q お子様の教育について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

保護者 図6－2 保護者の教育観（学校段階別）



保護者 表6－1 「子どもが大人になったとき自立できるか不安である」の割合（学校段階別・子どもの性別）

(%)

	小1～3生	小4～6生	中学生	高校生
男子	50.7	55.0	58.6	58.0
女子	46.0	44.0	49.2	49.1

Q あなたのご家庭では、お子様の生活や学習に関して、次のような約束やルールがありますか。

保護者 表6－2 家庭での約束やルールがある割合（学校段階別）

(%)

	小1～3生	小4～6生	中学生	高校生
テレビやゲームの時間	74.3	75.0	57.7	31.4
勉強の時間	66.2	63.8	47.7	27.5
お手伝い	48.6	53.2	45.8	34.4
お金の使い方	43.8	57.0	54.0	44.7
携帯電話やスマートフォンの使い方	37.0	42.9	56.7	52.3

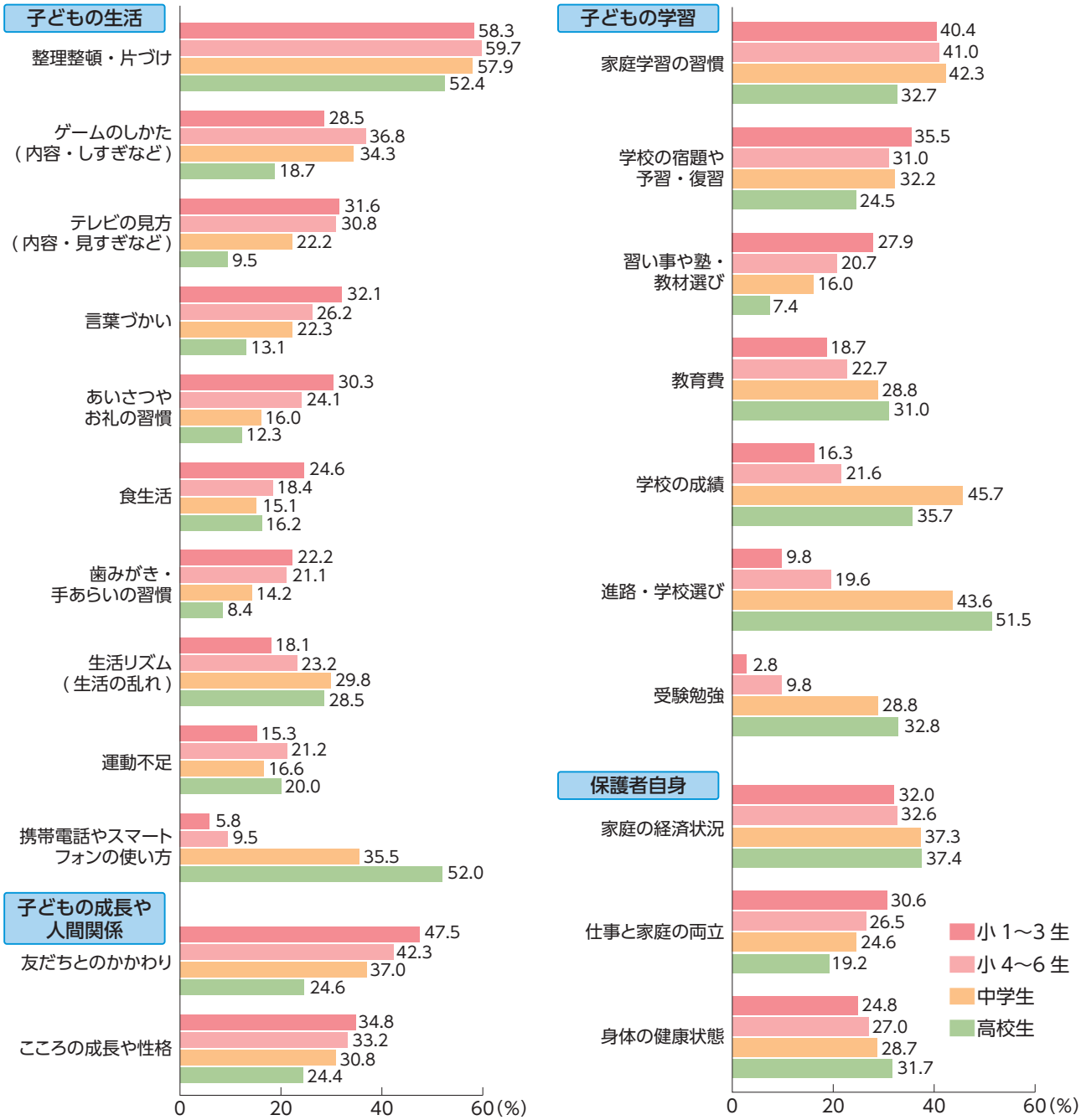
注1 「とてもあてはまる」+「まあてはまる」の%（図6-2、表6-1）。
注2 学校段階別に比較してもっとも割合が高い値に濃いアミカケをした（表6-2）。

保護者の悩みや気がかりは、学校段階が上がるにつれて、基本的な生活習慣から、成績や進路、携帯・スマホの使い方へと移行する

保護者の悩みや気がかりについて上位３位をみると、１位はどの学校段階でも「整理整頓・片づけ」である（小学生・中学生６割弱、高校生５割）。さらに小学生では「友だちとのかかわり」（４割５分）と「家庭学習の習慣」（４割）、中学生では「学校の成績」（４割５分）と「進路・学校選び」（４割）、高校生では「携帯電話やスマートフォンの使い方」（５割）と「進路・学校選び」（５割）が続く。また、保護者自身についてはどの学校段階でも「家庭の経済状況」についてもっとも悩んでいる。

Q あなたは、お子様やあなたご自身のことについて、次のような「悩みや気がかり」がありますか。

保護者　図６－３　現在の悩みや気がかり（学校段階別）



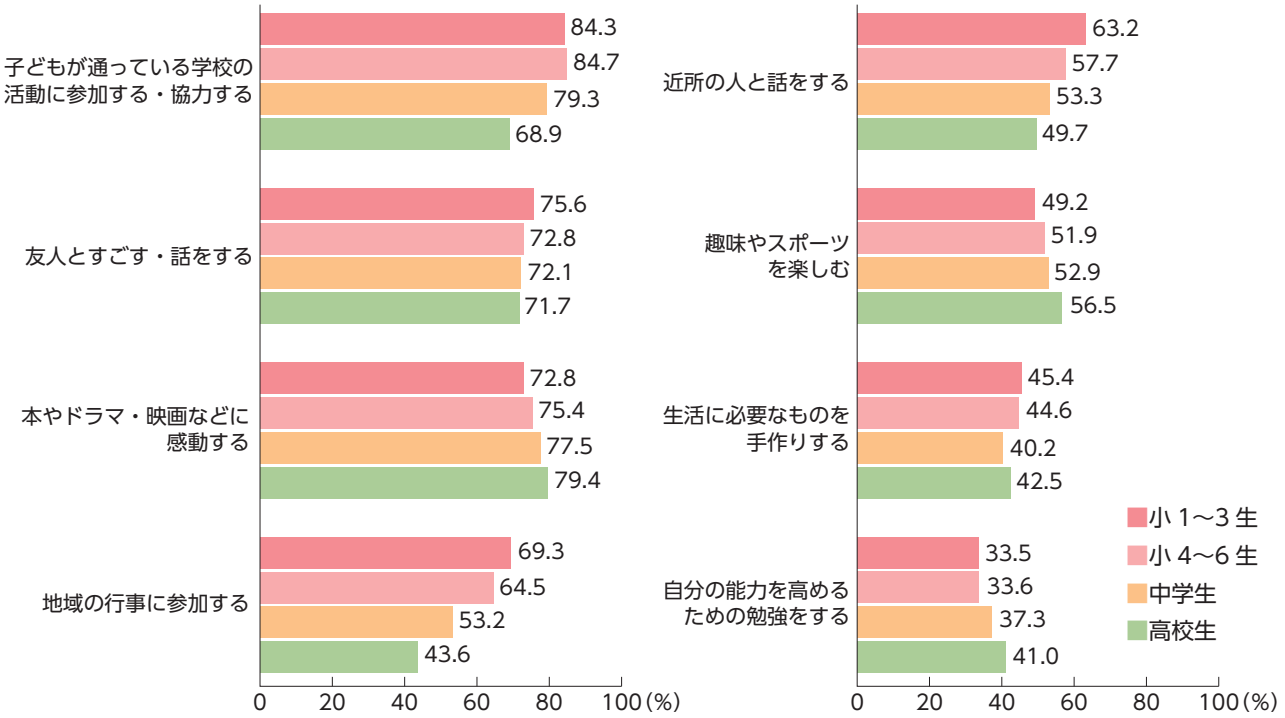
注１　複数回答。
注２　いずれかの学校段階で20％以上の選択率の項目を掲載した。

保護者の地域行事への参加状況が、子どもの社会活動（地域行事・ボランティア活動）の経験に影響している

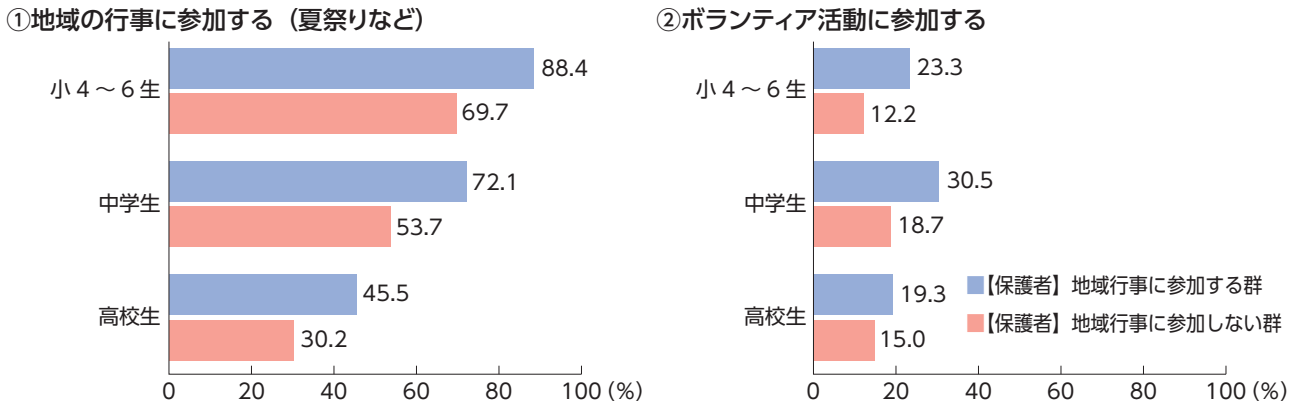
保護者自身の活動を尋ねたところ、「本やドラマ・映画などに感動する」「趣味やスポーツを楽しむ」「自分の能力を高めるための勉強をする」は、学校段階が上がるにつれて活動割合（「よくある」＋「ときどきある」、以下同様）が高くなる。他の項目では、学校段階が上がるにつれて、低くなる傾向がある。 また保護者が「地域の行事に参加する」割合と子どもの社会活動に関する経験（2項目）との関連性をみたところ、積極的に地域の行事に参加している保護者の子どもほど、社会活動に関する経験割合は高い傾向がみられた。

Q あなたはふだん、次のようなことがどれくらいありますか。

保護者　図7－1　保護者自身の活動（学校段階別）



子ども　図7－2　保護者自身の「地域行事への参加」と子どもの社会活動の経験との関連（学校段階別）



注1 「よくある」＋「ときどきある」の%（図7-1）。
注2 「【保護者】地域行事に参加する群」は、図7-1の「地域の行事に参加する」の項目について「よくある」「ときどきある」と回答した人、「【保護者】地域行事に参加しない群」は、「あまりない」「まったくない」と回答した人（図7-2）。
注3 ①と②は子どもが回答した「1年間の経験」に関する2項目（P.17参照）。小1～3生については尋ねていない（図7-2）。

東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所 共同研究「子どもの生活と学び」研究プロジェクト

「子どもの生活と学びに関する親子調査 2015」

調査企画・分析メンバー

プロジェクト代表者

石田　浩（東京大学社会科学研究所教授）／谷山　和成（ベネッセ教育総合研究所所長）

プロジェクトメンバー

耳塚　寛明（お茶の水女子大学教授）
秋田　喜代美（東京大学教授）
松下　佳代（京都大学教授）
佐藤　香（東京大学教授）
有田　伸（東京大学教授）
藤原　翔（東京大学准教授）
香川　めい（東京大学特任助教）
木村　治生（ベネッセ教育総合研究所副所長、東京大学客員准教授）
邵　勤風（ベネッセ教育総合研究所 初等中等教育研究室室長、主任研究員）
橋本　尚美（ベネッセ教育総合研究所研究員）
木村　聡（ベネッセ教育総合研究所研究員）
吉本　真代（ベネッセ教育総合研究所研究員）
太田　昌志（ベネッセ教育総合研究所特任研究員）
渡邉　未央（ベネッセ教育総合研究所研究スタッフ）

※所属・肩書きは、発刊時のものです。

本プロジェクトのWEBサイトのご案内

本プロジェクトや本調査に関しては、以下の WEB サイトに掲載しています。

東京大学社会科学研究所：**http://web.iss.u-tokyo.ac.jp/clal/**

ベネッセ教育総合研究所：**http://berd.benesse.jp/special/childedu/**

● お問合わせ先 ●

本速報版に関するお問合わせは、下記までお願いいたします。
(株)ベネッセホールディングス ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査 2015」係
TEL：042-311-3390（10：00～12：00、13：00～17：00 ／土日・祝日を除く）

ベネッセ教育総合研究所 初等中等教育研究室のWEB サイトのご案内
各種調査データに関しては、**http://berd.benesse.jp/shotouchutou/**

ベネッセ　初等中等　**検 索** で検索してください。

「子どもの生活と学びに関する親子調査2015」速報版
発 行 日：2016年3月14日　発行人：谷山 和成　編集人：木村 治生
発 行 所：㈱ベネッセホールディングス　ベネッセ教育総合研究所
編集協力：㈱ジー・アンド・ピー
5HNB03
©Benesse Educational Research and Development Institute
無断転載を禁じます。